史料紹介

元禄十年信濃国今井陣屋代官手代浅利吉右衛門「口書一札控」について

山本英二

キーワード　近世　江戸幕府　信濃国　代官手代　御用留

「口書一札控」は、信濃国今井陣屋代官手代浅利吉右衛門が元禄十年（一六九七）正月から八月まで書き継いだ史料で、松本女子師範学校旧蔵「郷土資料」として信州大学附属図書館中央図書館に所蔵されている。本史料の寸法は、タテ二六・五cm×ヨコ一七・七cmで、二つ目綴じの竪帳、丁数は墨付一〇六丁、表紙は欠いており、「口書一札控」という表題は、戦前に本史料を販売した古書肆によって補われたものである。もともと古書肆の販売当時、本史料は二冊に分かれていたが、二〇〇三年八月四日、山本が調査・整理した際に、あとから補われた酸性中質紙の表紙二枚と裏表紙一枚を除去し、錯乱したまま分冊されていた状態から、復元して一冊に合綴し直した。後補された裏表紙には、それぞれ赤色値段ラベル「古美術史跡巡礼／一・〇〇／文会堂書店／松本市源池」が貼られており、各冊一円、合計二円で松本市の古書肆を通じて購入されたことがわかる。

受入印は、一丁目表に「昭和七年十二月二十日購入／郷土資料／第六七四号ノ二」の方形朱印、七七丁目裏に「昭和七年十二月二十日購入／郷土資料／第六七四号ノ一」の方形朱印がそれぞれ捺されている。また除去した後補表紙の右肩にも「K／六五／六七四号郷土室」の受入ラベルが貼られている。さらに除去した二枚の後補表紙の裏側に「第　号／昭和　年　月　日／長野師範学校女子部」の青紫色受入印が捺されている。蔵書印は、一丁目表・七七丁目裏・七八丁目表に「松本女子／師範学校／図書之印」の朱印が捺されている。このことから一九三二年（昭和七）十二月二十日に、松本女子師範学校が購入したことが判明する。

受入印にある「郷土資料」とは、一九三一年（昭和六）、文部省による師範学校の学課改正に際し、愛国心の基盤として愛郷心を涵養する目的から、郷土研究を重要視し、基礎史料となる郷土資料の収集を全国で推進したことに因んでいる。松本女子師範学校では、購入あるいは寄贈などにより収集した郷土資料を、新設の郷土室で保管していた。また一九三六年（昭和十一）には『郷土研究資料目録』（長野県松本女子師範学校、一九三六年三月）が刊行され、収集した図書や古文書、標本類の概要を知ることができる。しかし「口書一札控」は、なぜか同目録には収録されていない。

松本女子師範学校は、一八八八年（明治二十一）、長野尋常師範学校に女子部が併設されたことに端を発し、一九〇五年（明治三十八）四月、松本市桐に開校された教員養成課程である。一九四三年（昭和十八）に改組されて長野師範学校女子部となった。一九四九年（昭和二十四）六月、国立信州大学の創設にともない、教育学部

松本分校となり、一九六六年（昭和四十一）の学部統合で廃校となった。

本史料は、信濃国飯島代官太田作之進勝輝の手代で、筑摩郡今井村御用屋敷、いわゆる出張陣屋に詰めていた浅利吉右衛門によって、元禄十年正月から八月まで書き留められた御用留である。内容的には、代官手代らとの間で授受した書状や、触書、願書、訴状、口書などが書き留められており、古文書学的には引付と呼ぶべきものである。当時、信濃国飯島代官に就任していた太田作之進は、もと幕府御細工同心の家柄で、元禄元年（一六八八）八月二十八日に御勘定となった。そして同二年（一六八九）五月朔日に御勘定から飯島代官に転じ、同十三年（一七〇〇）六月六日、現職のまま死亡している（『徳川幕府全代官人名辞典』東京堂出版、二〇一五年）。

太田は、信濃国伊那郡飯島に本陣屋を置き、伊那郡の幕府直轄領支配と天竜川による遠州への樽木運搬を担当していた。また佐久郡岩村田・筑摩郡今井・水内郡長沼に出張陣屋を置き、それぞれ代官手代を配置して支配に当たらせていた。このうち浅利吉右衛門は、今井に出張陣屋を構え、洗馬十三ヶ村と金山領四ヶ村の計十七ヶ村を支配していた。

現在知られている幕府代官日記は、十八世紀後半以降のものが多く十七世紀にさかのぼるものはほとんど知られていない。また当該時期の代官手代の御用留となると皆無に等しい。元禄期は、五代将軍徳川綱吉の賞罰厳明策により世襲型の土豪代官が大量に粛正され、全国を転勤する吏僚型代官へと変容する移行期にあたる。またこの時期には十八世紀以降に展開する惣代庄屋・郡中惣代といった中間支配機構がいまだ成立していない。すなわち本史料は、これまでの研究史上、空白であった時期の幕府直轄領支配の実態を示す貴重なものと評価できよう。

史料：元禄十年口書一札控

（前欠）越申候、御上ケ被成、皆済目録御渡し被成可被下候、去子ノ御年貢金通帳も拾七ヶ村分認越申候、村々銘々相納候金高も、別紙書付進上申候間、通帳ニ御記御印判被為遊被下候様ニ被仰上可被下候、委細之義ハ旧冬認申候書状ニ記進上申候、万喜追々可申上候、右之趣　御前可然様ニ被仰上可被下候、猶奉期永日之時候、恐惶謹言、

正月三日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

人々御中

「　」御年貢三分二米御直段為御窺之、例□当月末方ニ松本町米相場書取ニ越申候、当年も右之通ニ可仕候哉、今年ハ二月ニ閏御座候間、□月初方ニも可仕候哉、惣御代官所中揃申義ニ御座候間奉得御下知候、御窺被成御報ニ可被仰下候、以上、

正月三日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤仕可被成と珍重ニ奉存候、随而洗馬御料竹田村権六と申者之母、貧人ニ而独身之渡世仕候、然ル所ニ去ル五日之夜中、盗賊来り前割之斧を以、右女之頭を数ヶ所打破打殺、木綿布子弐ツ取之申候、論議仕候へ共、尓今知レ不申候、右布子壱ツハ表ねすミ色無紋、裏ニもねすミ（同色之）色之古をつき合（続）申候ニ而御座候、壱ツハ表あいみるちやニそめ、五所紋かけのつたを付ケ、白裏ニ而新敷木綿土而御座候由、御城下しちや（質屋）抔へ若持参又ハ商売抔ニ仕候

義も可有御座候、御六ケ敷御座候共心を付ケ申様ニ質屋抔へ被仰付可被下候奉頼候、梅村武兵衛殿へも、乍慮外右之趣可然様ニ御心得可被下候、恐惶謹言、

正月八日　浅利吉右衛門

蛯江源太左衛門様

人々御中

覚

四郡六尺給高弐拾三石六斗六升之内

一、米六石五斗四升九合　筑摩郡

此割高七千弐拾五石八斗弐升五合　但、百石ニ付九升三合二勺壱才余

右者、当子年江戸御台所六尺給米之割ニ候、村々致割府（符）、早々取立可被申候、以上、

子三月　作之進

浅利吉右衛門殿

去ル三日之御状相達候、如仰、新春之御慶御同意目出度申納候、旦那弥御機嫌能御越年被遊、御同意奉恐悦候、其元相替儀無御座、貴様御家内共御堅固ニ御重歳被成候由珍重奉存候、年始之為御祝儀、雉子番御上ケ、則披露致候所ニ、幾久目出度被思召候、相心得申進候様ニと御意御座候、

一、去亥之納分、子之三分一金御取立之分、二口ニ而弐百七拾四両弐百四文四分、今井村新介・衣外村源右衛門・竹田村兵右衛門年始之御礼ニ参候ニ付、右金被遣相届、亥ノ皆済目録御判形取指越申候、中村之義ハ皆済無之候ニ付、通帳ニ付是又御判取差越申候、子ノ三分一金も、通帳ニ御判取指越申、御請取可被成候、右中村亥ノ皆済遅成候付、手形壱通、子ノ三分一金半納之積り、不足ニ付村々連判手形被遣、何も相届申候、

一、今度参候者共ニ申聞候ハ、亥ノ皆済も滞候村有之、子ノ三分一金も年内相納可申所、相滞不届思召之故、其村々名主幷難渋之百性共、飯嶋へ可被召寄旨被仰候所ニ、貴様色々御訴訟被成候ニ付其通ニ被成置候、向後御年貢納儀、無相違様ニ可仕旨、其外色々申聞候、旦那ニも右之段御逢候節被仰聞候、然共、御機嫌能御逢、御雑煮・御酒なと被下首尾能罷帰候、冬中ニも名主幷納下り之百性飯嶋へ御越なく候段、貴様御不調法ニ旦那御しかり被成候段も為申聞候、

一、巳ノ御渡入名役人足扶持請取之帳幷長沼・松嶋名主口書共御入候由ニ而、紙袋被遣相達申候、

一、松本ゟ之御状も相届申候、

一、殿野入村三郎兵衛年始之御祝儀ニ罷越候、首尾能御目見へ致罷帰候、

一、境井村西善寺新地故潰、其跡あミた堂ニ成、堂敷御年貢ハ村中出し合相勤候由、惣而西善寺境内除地ニ成候儀ハ無之由、口上書ニ御座候由ニ而被遣相届申候、

一、去子之御年貢三分二米御直段御窺ニ付、松本町相場書之事、例年正月末方ニ相場書御座候由、当年ハ二月ニ閏御座候間、二月末方ニも御取可被成哉之由被仰聞候、御窺申候所ニ、閏月有之候とても延引可仕様無之候間、例年之時分ニ御取候様と被仰候、此方ニ而も時分聢と覚不申候、其元御扣御覧候て、いつもの時分ニ御取候而、江戸へ可被遣候、郡々ゟも定而例年之通ニ可参候間、左様ニ御心得可被成候、右之申候通、例年之時分ハ覚不申候へ共、

菟角正月ニ内々相場書ハ不入物かと存候、
一、六尺給、去子年分之割参候間、四郡割符ニ被成御書付被遣、御取立可被成候、猶期永日時候、恐惶謹言、
正月六日　松村仁左衛門
浅利吉右衛門様

佐久郡ゟも三分二米御直段御窺ニ付、米相場書之事例年之時分ニ差越可申哉と申来候、いつも二月十日比ニ取、十五日前江戸へ上ケ候由申来候、拙者共存候も其時分可然様ニ存候、とかく御扣ヲ御覧候て、よき時分可被遣候、大方佐久ゟ申来候時分ニ而可然存候、以上、
正月六日　仁左衛門
吉右衛門様

貴札忝拝見致候、弥御堅固ニ御勤仕珍重奉存候、然ハ洗馬御領竹田村之権六と申者之母ヲ、去ル五日之夜盗賊入打殺申候、木綿布子弐ツ盗取候由、御紙面之趣致承知候、町質屋共其外商売ニ右之衣服持来候者おさへ置、御左右可申候、委細諭儀仕、重而可申入候、尤梅村武兵へ方へ之御伝言可申達候、恐惶謹言、
正月八日　蛯江源太左衛門
浅利吉右衛門様

一昨八日之貴札、乍御報拝見仕候、先以其御地御別条無御座、恐悦ニ奉存候、
一、頓入様之御奥様御遠行被為遊候御儀、洗馬領之者共奉承知、乍恐為御悔惣名代ニ貴様迄、小坂村太郎左衛門伺公仕度旨申候間指越申候、可然様ニ奉頼候、
一、竹田村喜左衛門後家方へ、去ル五日之夜中盗賊来り木綿布子弐ツ取之、前割之斧を彼女之頭面へ数ヶ所打込打殺申之由、右村名主・組頭、去ル六日四ツ過キニ今井村へ訴来り候間、早速右村へ罷越、死人之疵相改、被取候衣類もやう抔味仕、昼夜共村中家別ニ銘々名主方へ召寄、諭議仕口書取之申候、右衣類村中ニ若有之義も御座候半と存、銘々家毎をさかし見申候へとも怪敷義も無御座候、遠方ゟ来候盗人共不被存候、左も御座候ハヽ、右女打殺申節、盗人之衣類へのりもかゝり可申候、左様之怪敷衣類も可有之哉と、右之通諭議仕候へ共、相見へ不申候、尤洗馬御代官所中名主・長百姓召寄、諭議仕口書取置申候、右後家隣村（家か）之者共別而諭議仕候へ共、怪敷義も知レ不申候、此者共ゟも口書取申筈ニ御座候へ共出来不申候、其外も諭議ニ付、口書共取申筈ニ申付置候へ共、是又出来不申候、若松本町へ右衣類持出、商売か又ハしち物ニも置可申哉、心を付ケ申様ニ密ニしちや等へ御申付ケ給候様ニと、蛯江源太左殿へも頼越申候、竹田村中銘々諭議之刻、不参之者も弐三人御座候、諭議仕候所、高遠領・諏訪領へ去ル三日之朝又ハ五日之朝参泊り罷有候候（行）而、七日之朝罷帰り申者も御座候、尤盗人入候日限より前方ニ罷出候へ共、諭議之時分不罷有候間、不審ニも御座候、依之、諏訪・高遠領支配之面々へ、右之わけ以書状申入、不参之者泊り候宿致諭議給候様ニ頼越可申と奉存候、未諭議も不束ニ御座候へ共、替り申たる義ニ御座候間、不取合先竹田村組頭市郎兵衛を指越御注進申上候、旦那御儀、遠州へ近々御発駕之様ニ奉承知候、貴様ニも来ル廿日前ニ江戸へ御立被成候由承候、旦那江右之わけ御窺被成候ためにもと奉存、先早々申上候、此上とくと致諭議、口書共取揃、貴様江戸へ御立前進上可仕候、出来申候口書共先越申候、御披見被成候ハヽ、大図

之様子ハ知レ可申哉と奉存候、委ハ市郎兵衛可申上候、此状夜ふけ候而認申候、わけも如何ニ御座候へ共、可然様ニ被仰上可被下候、御取込之所へ延引可仕と奉存候へ共、替り申たる義ニ御座候間、如此ニ御座候、併不被仰上共之義と被思召候ハヽ、御扣可被下候、菟角能様ニ奉頼候、

一、松本・諏訪・高遠領支配之面々へ、右之わけ以書状申越、在々之名主心ヲ付ケ怪敷義も有之候ハヽ、御知せ可給旨可申越哉と存候へとも、此段ハ貴様へ御相談之上、御了簡次第ニ可仕と先扣申候、御了簡之程御報ニ可被仰下候、是又六尺給米洗馬・御金山領之分、御書付ケ被遣、慥請取申候、割府仕取置可申候、右之趣御前可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

正月十日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

追而後家打殺候由、竹田村ゟ注進書壱通、同村大小之百姓口書壱通、洗馬領拾三ヶ村口書壱通、但御金山領も書のせ申筈ニ御座候へ共間ニ合不申候間、重而書のせ申候証文と引替可申候、夫故麁相ニ認申候ヲ越申候、和田町村半兵衛口書も指越申候、扨又、後家年六拾歳ニ罷成候由、是ハ重而取申候証文ニ記シ可申候、以上、

一、洗馬領亥ノ御年貢金、御請取被成候、貴様御手形越申候、

一、八日ニ者遠慮仕、諚議不仕候、昨九日ニ竹田村中大小之百姓・下男迄ニ申付ケ、入札為致候所、札数弐百四拾壱枚之内、不存候と有之札弐百弐拾枚、白札弐拾枚、存候（存ゟ）と御座候と申札壱枚御座候、右入札此方ニ置申候、重而指越可申候哉御報ニ可被仰下候、

尚々、去冬被仰聞候鍋屋忠兵へ手代おいはきニ逢申義、洗馬御料村々諚儀いたし、口書取之、其写進上申候、旧冬ニも越可申候得共、取込罷有候間延引仕候、以上、

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤可被成と珍重ニ奉存候、随而竹田村喜左衛門と申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗人来り、右之女を斧を以打殺、木綿布子弐ツ取之申候、右之わけ注進仕候間、右村へ罷越大小之百姓召寄諚議仕候刻、佐五右衛門と申穢多不罷有候、帰候而諚議仕候所、去ル六日之朝在所を罷出、其夜新洗馬町長右衛門と申者之方ニ泊り申候由ニ而、翌七日朝罷帰候、彼者諚議之節不罷有不審ニ存候、右宿仕候者之方へ怪敷衣類抔持参不仕候哉、何ニ而も胡乱成義ハ無之候哉、乍御六ケ敷御諚議被成、様子被仰聞可被下候、右盗人取申布子もやう諚議仕候所、壱ツハねすミ色無紋裏も同色、古キをぬい続申ニ而御座候、壱ツハ表あいみるちやニ染かけのつた五所紋裏ハ白ク新敷御座候由、右之わけ密ニ御支配所名主中へ被仰聞、心を付ケ申様ニ被成可被下候、奉頼候、恐惶謹言

正月十日　浅利吉右衛門

黒田軍左衛門様

早川九兵衛様

人々御中

改年之御慶、何方も御同前ニ珍重ニ申納候、弥御堅固ニ御越年可被成と目出度奉存候、随而洗馬御料竹田村喜左衛門と申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗賊来り、右女を斧を以打殺、木綿布子弐ツ取之申候、右わけ注進仕候間、竹田村へ罷越、大小之百姓召寄諚議仕候刻、勘七と申百姓不罷有候、帰候而諚議仕候所、去ル五日ニ在所を罷出、古見村吉兵衛方へ参泊り、翌六日ニ吉兵衛方を罷出、其夜小曽部村藤十郎方ニ泊り候由ニ而、翌七日之昼四ツ前ニ竹田村へ罷帰候、彼

者諚議之節、不罷有不審ニ存候間、右宿仕候者之方へ怪敷衣類抔持参不仕候哉、何ニ而も胡乱成義ハ無之候哉、乍御六ケ敷御諚議被成、様子被仰聞可被下候、右盗人取申布子もやう諚議仕候所、壱ツハ表ねすミ色無紋裏も同色、古キをぬい続申ニ而御座候、壱ツハ表あいみるちやニ染かけのつた五所紋裏ハ白ク新敷御座候、右之わけ密ニ御支配所名主中へ被仰聞、心を付ケ申様ニ被成可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

正月十日　浅利吉右衛門

山口彦右衛門様

人々御中

未得御意候へ共一筆致啓上候、先ハ改年之御慶、何方も御同前ニ珍重ニ申納候、随而洗馬御料竹田村喜左衛門と申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗賊来り、右女を斧を以打殺、木綿布子弐ツ取之申候、右之わけ注進仕候間、右村へ罷越大小之百性召寄諚義仕候而(刻)右村ゟ罷越、市蔵と申百性不罷有候、帰候而様子諚儀仕候所、去ル五日朝竹田村を罷出、其元御領内白河村長介と申者之方へ参弐夜泊り、七日之昼四ツ時分ニ罷帰候、彼之者諚義之節、不罷有不審ニ存候、右宿仕候者之方へ怪敷衣類抔持参不仕候哉、何ニ而も胡乱成儀者無之候哉、乍御六ケ敷御諚儀被成、様子被仰聞可被下候、右盗人取申布子もやう諚儀仕候所ニ、壱ツハ表鼠色無紋裏も同色、古キをぬひ続申ニ而有之候、壱ツハ表あいミるちやニ染かけのつた五所紋裏白ク新敷御座候由、右之わけ密ニ御支配所名主中へ被仰聞、心を付申様ニ被成可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

正月十日　太田作之進代

浅利吉右衛門

三輪甚四郎様

人々御中

未得御意候処貴札致拝見候、改年之御慶、御同前珍重ニ申納候、随而洗馬御料竹田村喜左衛門と申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗賊入、彼女を致殺害、衣類取之候付、御諚儀被成候処ニ、右村御百姓市蔵と申者、其刻不罷在、帰候而御諚議被成候所、去五日之朝竹田村を罷出、当領内白河村長助と申者之方江参弐夜泊り、七日昼四ツ時罷帰候由、御諚議之節、彼者不罷有御不審思召、右宿仕候長助方へ怪敷衣類等ニ而茂持参不申候哉、御諚儀仕可申入之旨被仰下致承知候、右白河村者拙者支配所ニ者無御座候、諏訪対馬守知行所ニ而御座候、筑摩郡竹渕村と申所ニ対馬守家来三井又左衛門と申者罷有候間、彼者方へ被仰遣候者、様子相知可申と存候付、為御心得申入候、恐惶謹言、

正月十日　諏訪安芸(アキ)守内

三輪甚四郎

浅利吉右衛門様

御報

尚々、不慮之義御座候ニ付、御苦労之段致察候、此方領分之内、自然無心元者御座候ハヽ、可被仰聞候、以上、

昨日ハ預御使札忝致拝見候、且又、竹田村之喜左衛門と申者之後家之儀ニ付而、委細先達而蛯江源太左衛門方へ御紙面趣より御境目之儀ニ御座候間、両人ニ罷出遂諚議を候様ニと被申付候ニ付、昨朝郷中へ罷出、夜ニ入罷帰候故御報延引仕候、就夫ニ、其元穢多左五右衛門、新洗馬町長右衛門方ニ一宿仕候由被仰聞候ニ付而、軍左衛門

只今洗馬町へ罷越候間、遂諚議を、此方ゟ委細之義可申進候、次ニ当町鍋屋忠兵衛手代之儀ニ付、其元村々被遂諚議を、口書被写被遣被入御念忝奉存候、貴面之節御礼可申上候、恐惶謹言、

正月十一日　　早川九兵衛
　　黒田軍左衛門

浅利吉右衛門様

未得御意候へ共一筆致啓上候、先以改年之御慶何方も御同前ニ珍重ニ申納候、随而洗馬御料竹田村喜左衛門と申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗賊来り、右女を斧を以打殺、木綿布子弐ツ取之申候、右之わけ注進仕候間右村へ罷越、大小之百姓召寄諚議仕候刻、市蔵と申百姓不罷有候、帰候而様子諚議仕候所、去ル五日之朝竹田村を罷出、其元御領内白川村長助と申者之方へ参弐夜泊り、七日之昼四ツ時分ニ罷帰候、彼之者諚議之節不罷有不審ニ存候、右宿仕候者之方へ怪敷衣類抔持参不仕候哉、何ニ而も胡乱成義ハ無之哉、乍御六ケ敷御諚議被成、様子被仰聞可被下候、右盗人取申布子もやう諚議仕候所、壱ツハ表ねすミ色無紋裏も同色古キをぬい続申ニ而有之候、壱ツハ表あいみるちやニ染かけのつた五所紋裏白ク新敷御座候由、右之わけ密ニ御支配所名主中へ被仰聞、心を付ケ申様ニ被成可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

正月十二日　　太田作之進代
　　浅利吉右衛門

諏訪対馬守様御内
三井又左衛門様
人々御中

昨十日之御飛札忝致拝見候、如仰、御慶御同前申納候、弥御堅固ニ御越年被成之由珍重奉存候、然者御料所竹田村之一儀被仰下候通具致承知候、得其意存候、近々内吟味仕追而委細可申上候、彼是御苦労共と奉存候、恐惶謹言、

正月十一日　　山口彦右衛門
　　浅利吉右衛門様

貴報

覚

一、米八斗四升五合　大池村
一、米七斗八升壱合　竹田村
一、米壱斗五升六合　衣外村
一、米四斗九升　南和田村
一、米弐斗三升七合　下和田村
一、米壱斗四升壱合　境村
一、米壱石壱斗四升　今井村
一、米弐斗五升八合　赤怒田村
一、米七合　金山町村

一、米五斗四升　小坂村
一、米三斗四升弐合　荒井村
一、米三斗五升四合　殿村
一、米弐斗八升五合　中村
一、米四斗七升弐合　和田町村
一、米九升八合　岩垂村
一、米弐斗壱升八合　反町村
一、米壱斗八升五合　殿野入村

右者、去子之年江戸御台所六尺給米之割如此ニ候、但、百石ニ付九升三合二勺壱才也、被得其意、取立相納可被申候、以上、

丑正月十二日　　浅利吉右衛門

右村々名主中

貴札致拝見候、如仰、御慶何方茂御同前申納候、然者洗馬御領竹田村喜左衛門与申者之後家方へ、去ル五日之夜中盗賊忍入、斧を以後家を打殺、木綿布子弐ツ盗取申候由、委細御紙面之趣致承知候、右

御諚議之節、市蔵与申御百姓不罷有候付御吟味被成候処、去ル五日之朝竹田村を罷出、対馬守知行所白川村長助与申者方へ参二夜泊り、七日之昼罷帰候故、市蔵儀御不審ニ被思召候付、白川村長助方へ怪敷衣類抔持参仕候哉、其外何ニ而茂胡乱成儀も有之候ハヽ、諚議仕様子可申進候之旨、得其意奉存候、彼盗賊取申候布子模様被仰遣、是又得其旨候、長助儀穿鑿仕、追而従是御左右可申進候間、左様可被成御心得候（御心得可被成候）、恐惶謹言、

正月十二日　　諏訪対馬守内
　　三井又左衛門

浅利吉右衛門様

御報

一筆致啓上候、然者一昨日被仰聞候対馬守知行所白川村長助義、諚議仕候処ニ、市蔵事去ル五日之昼前右長助方へ参二夜泊り、七日之朝其元へ罷帰候由、長助申義ニ御座候、市蔵義五日ニ此方へ参候ゟ何方へも不罷出、七日迄逗留仕候段、是又長助申御事候、怪敷衣類抔持参預ケ申候哉と、色々遂穿鑿候得共、何成共少も預り不申候由、即刻長助家内捜シ申候へ共、被仰越候通之木綿衣類之模様無御座候、勿論長助近所之百姓共も吟味仕候へ共、胡乱成義見聞不申候由申儀ニ御座候、右長助義ハ召籠ニ仕、番人付ケ置申候間、左様御心得可被下候、得と致吟味可申上と存、唯今迄延引仕候、恐惶謹言、

正月十四日　　諏訪対馬守内
　　三井又左衛門

浅利吉右衛門様

人々御中

被入御念貴札致拝見候、随而竹田村市蔵白川村長助方へ罷越泊り候わけ、一昨日申進候、依之、右長助御諚議被成候処、市蔵事去ル五日之昼前長助方へ参二夜泊り、七日之朝其元を罷出帰候由、尤長助方ニ逗留仕候内、何方へも不罷出候段、長助申之由被仰聞得其意存候、市蔵申口右同断ニ而御座候、竹田村喜左衛門後家方ニ而賊申候臓（臓）物模様申進候処、其趣を以長助家内為御捜御覧被成候へ共、右申進候模様之木綿衣類無御座候由、勿論長助近所之者共迄御吟味被成候へ共、胡乱成義見及聞及申者も無御座候由、扨又、長助義御召籠番人を御付ケ置被成候旨、被入御念候御事ニ御座候、市蔵申口と長助申口と相違無御座候、其上屋捜被仰付候へ共、怪敷義も無御座候上ハ、長助御召籠御赦免被成可然奉存候、御六ケ敷御座候処ニ被入御念候御穿鑿共ニ而御座候、右之趣太田作之進方迄可申聞候、何茂貴面之節御礼旁可得御意候、恐惶謹言、

正月十四日　　浅利吉右衛門
　　三井又左衛門様

御報

尚々、梅村武兵衛方へ御伝言具申聞候、此状箱村次ニ遣申候間、御報も右之通ニ而可被遣候、以上、

一筆致啓上候、弥御堅固御勤役可被成与珍重ニ奉存候、然者先日仰被下候洗馬御領竹田村江盗賊入盗取候木綿布子弐ツ之義、委細御紙面之趣致承知、当町中質屋共随分念入諚議仕候処ニ無覚束儀も無御座候、其上町庄屋・質屋不残弐通之証文差出し候間、則其元へ差遣候、此已後若町江右之品持来り候ハヽ、御左右可申進候、尤弐通之証文御披見以後、此方江御返シ可被成候、恐惶謹言、

正月十四日　　蛯江源太左衛門

浅利吉右衛門様
参人々御中

覚

一、木綿布子　壱ツ
表ねつミいろむもん
うらハねつミいろ古キヲ次合

一、木綿布子　壱ツ
表あいミるちや
五所紋かけのつた付
うらハ白木綿新敷ヲ付

右之通、惣町中・寺社・借屋等迄申聞候所、少茂無覚束義無御座候、此已後若町へ売ニ持来候ハヽ、押置、早速御注進可仕候、為後日仍如件、

元禄十丁丑年正月十日

本町問屋　倉品七郎左衛門
同町庄や　今井六右衛門
中町庄屋　関仁右衛門
井口伝七郎
東町庄屋　上原善左衛門
戸田五左衛門
伊勢町庄屋　林平兵衛
博労町庄屋　竹花八郎左衛門
飯田町庄屋　三輪忠兵衛
小池町庄屋　藤森儀左衛門
宮村町庄屋　川部喜太郎
和泉町庄や　高美与次右衛門

御奉行様

安原町庄屋　佐野覚兵衛
上横田町庄屋　平林甚五兵衛
下横田町庄屋　小松惣右衛門

覚

一、木綿布子　壱ツ
表ねすミいろむもん
うらハ由木綿ねすミ色古キヲ次合

一、木綿布子　壱ツ
表あいミるちや五所文かけのつた付
うらハ白木綿新敷ヲ付

右之二通御諭儀被遊候ニ付、当二日ゟしちニ取置候木綿布子銘々委細掛御目ニ申処ニ、御書付之通成衣類只今迄質ニ取不申候、此已後仲間之者方へ持参候ハヽ、早速御注進可仕候、若隠置後日ニ相聞へ候ハヽ、何様ニも可被仰聞候、為後日惣質屋共連判仍如件、

元禄十丁丑年正月十日

本町質屋五人組　市郎右衛門
源　蔵
徳左衛門
同町五人与茶や七左衛門世悴　虎之介
又六郎
伝兵衛
権九郎

伊勢町五人組

源兵衛
三十郎
伝兵衛
善兵衛

同町五人与

平兵衛
彦右衛門
左五右衛門（兵ヘ）
七郎右衛門
長　介

中町質屋五人組

甚兵衛
伝七郎
太兵衛
平兵衛
金兵衛

同町五人組

伊右衛門
七郎兵衛
半之介
源三郎
助七郎

中町五人組

兵左衛門
兵右衛門
六兵衛

平右衛門
五兵衛

小池町

市兵衛

東町質屋五人与

市兵衛
助右衛門
藤左衛門
惣右衛門

山部小路
東町五人与

七郎右衛門
孫右衛門
五左衛門
市左衛門

同町五人組

清右衛門
作左衛門
源左衛門
杢左衛門
与次兵衛
七兵衛

吉右衛門跡

御同心小頭

川上八郎大夫殿
岡賀五大夫殿

一筆致啓上候、然者先頃預御細書候御料所竹田村勘七義ニ付、古見

村吉兵衛・小曽部村藤十郎方諚儀仕候処、少も疑敷儀無之趣ニ御座候条、則口書為致両通指越申候、猶又、此以後胡乱成儀も御座候ハヽ、心付申候様ニ村々名主共へ茂申付候、万一替義も御座候ハヽ、追而可申上候、恐惶謹言、

正月十四日　　山口彦右衛門

浅利吉右衛門様

人々御中

小曽部村藤十郎口書

一、竹田村勘七義ニ付、御尋之趣承知仕申上候、此者義私女房之伯父ニ而御座候故、去ル六日昼前為年礼私方へ罷越候処、翌七日之朝竹田村ニ而諚儀事有之間、早々罷帰候様ニと勘七世悴呼ニ参候故、早々竹田村へ罷戻申候、一夜逗留之内外ゟ見廻之者壱人茂無御座候、其身衣類又ハ咄之様子ニ而も聊疑敷儀無御座候、尤何ニ而も持参物不仕罷帰申候、此外申上候義毛頭無御座候、自然相違之義申上、後日ニ相知レ申候ハヽ、いか様之曲事ニも可被仰付候、為後日仍而如件、

元禄拾丁丑年正月十四日　　小曽部村　藤十郎

山口彦右衛門様

右藤十郎申上候趣、私共儀も承、少も相違無御座候、以上、

洗馬大庄屋　原八右衛門

熊谷九右衛門

小曽部村名主　伝右衛門

同　弥七郎

組頭　市右衛門

同　助右衛門

同　孫九郎

同　作之丞

古見村吉兵衛口書

一、竹田村勘七義ニ付、御尋之趣承知仕申上候、此者儀私甥ニ而御座候故、当正月五日昼時分為年礼罷越、一夜逗留仕、翌六日小曽部村藤十郎方へ罷越候由申、私方を罷出候、一夜逗留候内外ゟ見廻候者壱人も無御座候、其身衣類又ハ咄之様子ニても少も胡乱ケ間敷儀無御座候、尤何ニ而も持参も不仕罷帰申候、此外申上候儀毛頭無御座候、自然相違之義申上、後日ニ相知レ申候ハヽ、いか様之曲事ニも可被仰付候、為後日仍如件、

元禄十丁丑年正月十四日　　古見村　吉兵衛

山口彦右衛門様

右吉兵衛申上候趣、私共義も承、少も相違無御座候、以上、

洗馬大庄屋　原八右衛門

熊谷九右衛門

古見村庄屋　武右衛門

同断　久之丞

組頭　長左衛門
同断　八左衛門
同断　茂左衛門

被入御念貴札忝致拝見候、余寒も甚敷御座候へ共、弥御堅固ニ御勤候由珍重ニ奉存候、随而竹田村喜左衛門後家方へ盗賊入候ニ付、諚儀之刻、同村勘七郎他行仕、其御地御領内江罷越候わけ去ル比申進候処、古見村吉兵衛・小曽部村藤十郎、右両人方御諚儀被成候へ共、怪敷義無之趣口書両通被遣一覧仕、此上方ニ留置申候、此以後替儀も御座候ハヽ、可被仰聞候旨得其意存候、御六ケ敷可被思召処、忝奉存候、何も貴面之刻御礼旁可得御意候、尤右之趣、太田作之進方江可申聞候、恐惶謹言、

正月十五日　浅利吉右衛門

山口彦右衛門様

御報

尚々、旧冬当飯田町鍋屋忠兵衛売子、於今井松原追剥逢候段御聞被成候ニ付、其御領御吟味被成、御連判口書御取置、写黒田軍左衛門方迄被遣致承知候、入御念候段忝仕合存候、委細貴面之節万々可得御意候、以上、

改年之御慶不可有尽期候、先以貴様弥御堅固御重年被成珍重奉存候、然者其御領竹田村後家方へ去ル五日之夜盗賊入候付、当町質屋吟味被成度旨蛯江源太左衛門方へ御内意被仰遣、其段役人共江源太左衛門為申聞候付、爰元領分中遂吟味候様ニと被申付、則其元竹田村近所之村々江、黒田軍左衛門・早川九兵衛早速罷出遂吟味候得共、当分無心元者無御座候ニ付、村々連判口書取罷帰候、右之外領分中委細ニ申触候、其後軍左衛門・九兵衛方迄新洗馬町之長右衛門方へ御領穢多佐五右衛門一宿仕候由被仰下、是又軍左衛門早速洗馬町へ罷越、長右衛門手前屋さかし迄申付、段々遂僉儀候所ニ、去ル六日之晩佐五右衛門・彦作と申者罷越、宿借り申候付為致一宿、翌七日之朝左五右衛門迎人参罷帰候由、彦作義ハ当領一日市場村之者之由承候ニ付相尋候処ニ、保高町穢多之由申候、一日市場村縁類方ニ彦作女房預ケ置折々罷越候、就夫、一日市場村之穢多と申候事被存候、於洗馬町左五右衛門・彦作両人一宿仕、其上左五右衛門方へ当三日ニ彦作罷越、六日之朝迄致逗留候由申ニ付、代官田中九左衛門遂諚儀候処ニ、差当り無心元儀も無御座候故、口書取申候、新洗馬町不残、穢多両所迄遂諚儀、是又為致口書候、右村々口書写壱通・洗馬町口書写壱通幷洗馬町長右衛門・同女房・保高町彦作口書写三通、懸御目候、外之村々口書ハ何茂相替義無御座候付、此度ハ不懸御目候、此上御尋被成度儀御座候ハヽ、可被仰下候、早速吟味可申付候、右長右衛門幷穢多彦作儀ハ致蔵込、所へ預ケ置申候、左五右衛門御諚儀ニ付若相替儀も可有御座かと、右之通申付置候、猶重而可得御意候、恐惶謹言、

正月十五日　秋本源五兵衛
菅沼金太夫
川村介太夫

浅利吉右衛門様

人々御中

差上ケ申一札之事

今度御料竹田村権六と申者之所へ、去ル五日之夜盗賊入、権六老母ヲ打殺衣類二ツ取申候由、内壱ツ表鼠色無紋裏も同色古キぬいつき、

又壱ツハ表あいミるちやかけのつた五所紋うらハ白ク新敷御座候由、浅利吉右衛門様ゟ右之趣為御心得被仰遣候ニ付而、御諚儀被仰付、依之、名主・長百性・末々之小百性迄集、翌六日ゟ今日迄之内、右色書之衣類其外何ニ而も雑物等、質物或ハ預り又ハ商売之儀不仕候哉と町中人別ニ遂諚儀候得共、左様之族之者壱人も無御座候、乍此上右之衣類何ニ而も不審成諸色持来、質物商買之儀申者候ハヽ、心ヲ付遂吟味不見届者ニ候ハヽ、急度押置御役人所迄早速御注進可申上候、若見のかし聞のかしニ仕候と脇ゟ於相知ハ、名主・五人組迄何様之曲事ニも可被仰付候、為後日手形如件、

元禄十年丑正月十一日　　塩尻与洗馬町

庄屋　平　助　印
問屋　伝左衛門同
同　勘之丞　同

黒田軍左衛門殿

与頭　茂兵衛　同
同　平　八　同
長百性新右衛門同
同　弥之介　同

惣百姓連判

差上ケ申一札之事

一、当月五日之夜、和田御領竹田村権六と申者之処江盗賊入、権六老母を打殺衣類弐ツ取申由、内壱ツハ表ねすみ色無紋裏ハ鼠色之古キを次合候、又壱ツハ表あいミるちや五所かけのつたを付白裏ニ而新敷候、右之品を取立のき申由、就夫、浅利吉右衛門様御領所之内御諚儀被遊候得共、未相知レ不申候由、依之、御境目之義ニ御座候得者、別而御諚儀委細ニ被仰付候ニ付、村々名主・長百性者不及申、末々小百性ニ至迄遂吟味申候得共、只今迄毛頭左様之訳不奉存候、乍此上右之衣類致持参質物等ニ置申度と申か、又者売申度と申か、惣而不審成もの罷越、見届さるニおゐてハ急度致諚儀、彼者押置早速御注進可申上候、若左様之族見逃聞逃仕候と脇ゟ於相知ルニハ、庄屋・組頭之儀者不及申上ル、五人組末々之者迄、何様之曲事ニも可被仰付候、為後日連判手形仍如件、

元禄十年丑正月十日　　南新村庄屋　勘兵衛　印判

与頭　所左衛門　同
長百性　兵九郎　同
同　源七郎　同
同　金右衛門　同

早川九兵衛殿

同　文右衛門　同
同　伝兵衛　同
同　源右衛門　同
平右衛門　同
忠兵衛　同
八兵衛　同
権七郎　同
杢兵衛　同
伊兵衛　同
文四郎　同
藤兵衛　同
平兵衛　同
庄五郎　同
又右衛門　同
伝九郎　同

善右衛門　同
弥次兵衛　同
六兵衛　同
組手代
濱長右衛門　同

洗馬町長右衛門女房口上書覚

去ル六日之晩非人宿ニ当り申候、長右衛門儀ハ薪伐ニ山江参、我等共計罷有候処ニ、六日之日入比ニ、何方之者共ニ不知レ両人参候而、宿借り申度之由申候ニ付而、宿賃拾弐文宛両人分弐拾四文宿賃取申候、此外ニ買物預り物とても仕不申候、明ル七日之日出比ニ罷立申候、両人共こがい祝ヲ申町之内廻り候由、弥迎之者も従竹田参候由、是又長右衛門申候、右泊り候両人之者衣類之義ハ、三十計之男下ニハ嶋之白キ布子、上ニハ鼠色ニ地形之大キ成ヲ付ケ、布子弐ツ着申候、脇指ヲさし申候、今壱人ハ年比五十六七計、此者之衣類、下ニ布子、色ハ見留メ不申候、上ニハこんの布子着し申候、丸腰ニて此者ハ参申候、何も両人共ニ木曾ゟ参候由申候、此外何様之義御尋候共存不申候、以上、

丑正月十一日　洗馬町
長右衛門女房印

黒田軍左衛門殿

穢多彦作口書　年五拾弐

一、私儀、今月三日御領竹田村姉聟穢多喜平治所へ年始之祝儀ニ参、同六日之朝五ツ時まて罷有、甥佐五右衛門同道仕、こかい祝ニ罷出、洗馬町頭ニ而小八と申穢多ニ逢申候、それより本山迄参、洗馬町江罷帰、六日晩長右衛門所ニおい佐五右衛門一所ニとまり、壱人ニ付木銭拾弐文ツヽ出し申候、七日之朝、こかひ悦（祝、以下同じ）ニ罷出候節、御領所竹田村より佐五右衛門迎之もの参、村ニ夜討御座候故迎ニ参候、早々罷帰候様ニと申候ニ付、両人一所ニ罷帰申候、おい佐五右衛門儀、六日之夜宿不罷有候故、御僉議ニ逢申ニ付無心元存、七日晩より十二日之朝迄竹田村江ニ罷有候へ共、相替儀茂無御座候故、十二日四ツ時分ニ一日市場江罷帰申候、私儀住所、保高組保高町穢多にて御座候、手前不罷成候故、私弟穢多山三郎と申穢多家内ニ成罷有候、右之仕合故女房者一日市場村こじうと久七方ニ預ケ置申候、右之女房四年以前より病気ニ罷成候故、一両年者出入はこくみ申候、一日市場村穢多にてハ無御座候、

一、洗馬町長右衛門方ニ預ケ物にても売物にて茂不仕候哉と御尋被成候、毛頭左様之儀不仕候、長右衛門前方知人にても無御座候、六日之晩宿借申まてニ御座候、

一、おい佐五右衛門方より預りものにて茂、買物にても毛頭不仕候、十二日之朝罷帰候節、こかい悦之米弐升計御座候を持参仕候、

一、五日之夜、喜平治所ニとまり申ニ付、喜平次おや子之もの共無心元事茂有之候哉と御尋被成候、是又左様之儀無御座候、喜平次・佐五右衛門・私三人一所ニふせり申候、如何様ニ御尋被成候得而も、此外一言可申上様無御座候、以上、

丑正月十三日　穢多
彦作印

洗馬町長右衛門口上書之事

当月六日之晩非人宿ニ相当り候付、日之入頃ニ両人参候故留申候、壱人一日市場村之者、年頃五十余ニ相見へ申候、壱人者御領竹田村

之者、年頃三十計脇差さし参候、一夜留明七日之朝、何方之者やらん弐人参、こかひ祝ヲ申参候者ハとまり不申候哉と尋来候処、右泊り候両人罷出、尋候者ニ致面談、在所ニて母気色悪候間迎ニ参候由ニて、両人共ニ引連罷帰申候、右泊り申候賃銭壱人ニ付而十弐文宛、両人にて弐拾四文泊り銭取置申候、此外ニ預り物・買物一切仕不申候、尤竹田者と前方近付にて御座候哉覧と、御尋被遊候得共、毛頭近付智(知)人にても無御座候、此外何様之儀御尋被遊候共、一言可申上様無御座候、以上、

丑正月十一日　　洗馬町
　　長右衛門印

黒田郡(軍)左衛門殿

去ル十三日之御書、翌十四日ニ竹田村市郎兵衛持参奉拝見候、先以　旦那益御機嫌能被為成御座恐悦奉存候、来ル十八九日ニ遠州江御発駕被遊候旨奉承知候、

一、竹田村喜左衛門後家方へ忍入候盗賊、段々僉儀仕候得共、尓今怪敷義も無御座候、前方申付候僉儀之口書共出来仕候間指越申候、御披見ニ被入可被下候、最前竹田村ゟ注進書幷同村中家別銘々名前之口書、名主兵右衛門記シ指越申候、則右手形弐通ニ札を付ケ申候、先日越申候と御引替可被遣候、筑摩郡御代官所拾七ヶ村連判手形ニ、御金山領四ヶ村間ニ合不申候故記シ不申候キ、此度右証文認直シ御金山領も書のせ申候、最前越申候と是又御引替被遣可被下候、後家隣之者共致僉儀口書共取之越申候、諭儀候節他行候者共手錠申付ケ置、諭儀之上泊り候他領之宿々、其支配〳〵江委細以書状申入候処、何も念入候諭義共ニ而御座候、則進状・返状之写幷他行之者共宿仕候者之口書、其支配人中ゟ参候、則帳面ニ記シ指越申候、他行之者共申口と宿仕候者之申口と相違無御座候、宿仕候者之義召籠ニいたし被置候由、諏訪・松本役人中ゟ申来候間、他行之者と宿と之申口相違無之、諭儀之様子ニも怪敷儀無之上ハ、召籠之者共義ハ被致赦免可然候由、支配之面々中へ返報ニ申遣候、他行之者之義ハ、日比被仰付を相背名主方へ断も不仕、他所ニ泊り候段不届至極ニ被為思召候由申渡、手錠免シ不申候、此已後弥怪敷義も無御座、他領之宿仕候者共も召籠赦免被致候ハヽ、他行之者共手錠御赦免被遊可然様ニ奉存候、此段冝様ニ被仰上可被下候、右他行之者共宿々之儀、諭儀不仕候而ハ不審難晴御座候故、御書到来以前ニ彼支配人中へ書状遣し申候、委ハ進状・返状之写帳面ニ記シ越申候、

一、竹田村中入札諭儀之節、白紙札幷存寄御座候と書申札御座候由申上候処、右両様諭儀可仕旨被仰下候間、吟味仕候処、竹田村小百性共幷三右衛門・次郎兵へ・市郎兵衛・三郎兵へ・七兵衛と申者之下男共ニ而御座候、右之者共無筆其上怪敷儀不存候間、白紙札ニ而入申之由申候、胡乱成儀存罷有隠置、重而訴人御座候て顕申候ハヽ、如何様之曲事ニも可被仰付旨申候、存寄御座候と書申札主諭儀仕候処、同村又兵衛世悴弥七郎と申者ニ而御座候、諭儀仕候へハ、今度盗人之義ニ付何ニ而も怪敷義存寄不申候、然ルニ大小之百性入札被仰付候刻、大勢打重り候場所ニ而閙ケ敷札ニ書付ケ申とて、存寄無御座候と書可申を無之字を書おとし申候、右御穿鑿付少も怪敷義乍存隠置、他所ゟ顕申候ハヽ、如何様之曲事ニも可被仰付旨申候、右之者共連判口書差出シ申候間指越申候、御上ケ可被下候、此度差上候口書共ニ三付ヲ仕候へとも、御覧被遊候ニも御取紛もと奉存、口書幷進状・返状之写帳面ニ仕差上ケ申候、

一、江戸へ被遣候飛脚、竹田村之者ニ申付ケ、昨十六日ニ御状箱為持、江戸へ指越申候、

一、御勘定所江御注進書之御扣被下拝見仕、乍恐御尤奉存候、

一、先書ニも如申上候、蛯江源太左殿へ盗人之わけ内証申越候処、隼人正様達御耳ニ、洗馬境松本領村々支配之役人中へ被仰付、委細之御詮儀共ニ御座候、乍憚感入奉存候、御序之刻、御家老衆迄右之わけ、従　旦那被仰遣可然乍恐奉存候、其外へハ拙者方ゟ　旦那被仰候趣相心得可申遣候、右之趣可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

正月十七日　　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

人々御中

尚々、村々去ル子之春川除出人足御扶持方請取帳、名主共判形揃進上申候、以上、

尚々、左之御用方書物等取込罷有候間、御報延引仕候、以上、

貴札忝致拝見候、如仰、改年之御慶御同意ニ目出度申納候、先以各様御堅固ニ御越年被成候由、珍重ニ奉存候、随而作之進御代官所竹田村喜左衛門と申者之後家方江盗賊入、右女を打殺、木綿布子弐ツ取之申ニ付、其臓(贓)物模様蛯江源太左衛門殿江申進、御内意御頼申候処、其趣御役人中江源太左衛門殿被仰請候得ハ、御家老中御聞被遊、御支配之御役人中江被仰渡、其御地御両人御領内村々御穿鑿被成候得共、あやしき儀無御座候故、村々連判口書被仰付、委細御吟味被成候段被仰下、得其意奉存候、扨又、竹田村佐五右衛門と申穢多、彼盗賊せんき之刻他行仕候間、罷帰候而吟味仕候得者、新洗馬町之長右衛門方江去ル六日ニ参、一宿仕候由申候、依之、不審ニ存、黒田軍左衛門殿・早川九兵衛殿迄、右之訳申進御頼申候所、右町江軍左衛門殿早速御越、彼長右衛門方屋さかし被仰付、其上御僉儀被成候得ハ、去ル六日之晩佐五右衛門幷彦作と申穢多、長右衛門方江罷越一宿仕、佐五右衛門儀者翌七日之朝、迎人ヲ請罷帰候旨、長右衛門口書出し申之由、右御せんさく之趣、あやしき儀も無御座候へ共、佐五右衛門此方ニてせんさく之上、如何様之儀も出来可仕哉と、長右衛門儀御召籠ニ被仰付置候由、被入御念候御事と奉存候、左五右衛門儀手錠を打、召籠(込)指置申候、併佐五右衛門僉儀仕候所、其御地ニて御せんきの砌、長右衛門申口と佐五右衛門申口と相違無御座、別ニ恠敷儀も無御座候、左候へハ長右衛門御召籠之儀、御赦免被成可然様ニ奉存候、且又、彦作と申穢多、其御地御領分一日市場村之者之由、御聞被成候所、保高町穢多之由申之候間、依之、彼地御支配人田中九左衛門殿御僉儀被成候得共、胡乱成儀も無御座候付、口書御取被成候由、被入御念候御事可申上様も無御座候、殊新洗馬町不残穢多所迄、御僉儀被成候由得其意奉存候、右御僉儀共之口書之内写五通被遣、請取一覧仕、委細之御僉儀共と奉存候、右之段々委作之進方へ可申遣故、折節取込罷有候、近内以参上御礼旁可得其意候、恐惶謹言、

正月十七日　　浅利吉右衛門

河村助太夫様

藤(菅)沼金太夫様

秋元源五兵衛様

貴報

去ル十日之来札相達候、

一、竹田村之喜左衛門と申者之後家所へ、去ル五日夜盗人入、木綿

布子弐ツ取之、木割斧ニ而後家ヲ打ニ而殺候由、翌六日ニ所之者其元へ訴来候付、被相越見分被申候所、後家頭幷面之内ニ十ヶ所打疵有之候故、遠方ゟ来り候盗人ニ而茂有之間敷と、村中不残呼寄諭議之上口書取之、右注進書共ニ四通被指越之、令一覧候、被盗候木綿ぬのこもやう致吟味、自然村中ニ右之衣類可有之候哉、又殺手之衣類ニ血付申事可有哉と被存、屋さかし被致候得共、怪敷儀も無之候由、其外村々名主・百姓呼寄諭議被致候由、右後家近所之者共、別而諭議被致、口書共取被申筈、其外口書共被申付候得共、出来不申候故重而可被指越由、令承知候、

一、此度参候竹田村組頭市郎兵衛ニ、此方ニ而諭議申候得ハ、後家甥善七幷孫兵衛・久左衛門家近所候由、其内善七・久左衛門ハ後家親類候由、孫兵衛儀近所と申他人之事ニ候へハ、別而諭議可有之筈ニ候、善七・久左衛門・孫兵衛能々僉儀可被致候、

一、諭議之砌出合不申候者共被致諭議候由、定而口書共取可被申と存候、其内取わけ三九郎と申者、六日之夜和田町村半兵衛所へ参泊り、七日ニ罷帰候由、六日之朝右後家右後家諭議有之を不存義ハ有之間敷所ニ、他所へ参候段不審ニ候間、能々僉義可被致候、

一、其外他行仕候高遠領・諏訪領之内ニ泊り候者有之由、依之、諏訪・高遠領支配人之方へ申遣し、右之者共泊り候宿諭議給候様ニ、書状遣可申哉之由被申越候、右泊り候宿之義ハ先延引被致、作之進御代官所竹田村喜左衛門と申者之後家、当正月五日之夜、何者之仕わさニ候哉、斧ニ而被打殺木綿布子弐ツ被取申候、則別紙ニ書付ケ進シ候もやうの衣類売買抔仕、又ハ質物ニ取候者有候哉御聞合、自然胡乱成義御座候ハヽ、為御知被下候様ニと可被申越候、

一、松本へ者蛯江源太左方へ、内意頼越被申候由、令承知候、

一、竹田村中手形ニ庄屋兵右衛門名判無之候ニ付、市郎兵衛ニ相尋候へハ、兵右衛門飯嶋へ罷越候、留守之義と申候、然共、庄屋之事ニ候へハ、判形無之候而ハ如何候間、此度被指越候手形之通、今壱通認、兵右衛門名判加取置可被申候、重而引替可申候、

一、洗馬領村々手形ニ御金山領之者共判形無之候間、重而取直シ引替可被申候由、令承知候、

一、後家諭議ニ付竹田村中之者ニ入札被申付候故、札数弐百四拾壱枚有之内、弐百弐拾枚ハ不存候と書付ケ、弐拾枚ハ白札、壱枚ハ存寄御座候と書申候由、不存候と申札ハ其通ニ候、白札不審ニ候、是ハ若無筆ニ而白札ニ致候哉、但存寄有之致候義ニ候哉、是又諭儀可有之、存寄有之と書候壱枚之札ハ取わけ、諭儀者ニ候間、村中物書候者共ニ右之文言為書見被申候ハヽ、知可申と存候間、左様相心得諭議可被致候、

一、江戸へ御注進申遣候此状箱、江戸屋敷渥美庄右衛門方迄、竹田村百姓ニ為持遣し可被申候、御注進追書之写致越候、一覧可被申候、

一、我等事、遠州へ来ル十八九日比出立可申候、仁左衛門其比飯嶋ゟ直クニ江戸へ帰り可申候、右之用所も有之、右之日限過候ハヽ、江戸迄申可被越候、此状箱ハ早々江戸へ指越可申候、竹田村計ニ限色々悪事有之、合点不申候、以上、

正月十三日　　作之進

浅利吉右衛門殿

覚

一、信州拙者御代官所筑摩郡竹田村百姓喜左衛門と申者之後家、年六拾歳小家ニ且壱人住居仕候所ニ、当正月五日之夜盗人入候と相見江、木綿ぬのこ弐ツ盗取、右後家ヲ木割斧ニ而打殺シ申候由、

其郡ニ指置申候手代方江、所之者訴来候ニ付、罷越僉義仕候所、後家之甥善七と申者近所ニ罷有、六日之朝後家ニ用事御座候而参候へハ、表口錠ヲおろし置、裏口之戸へ細目ニ明御座候間、内へ入見申候へハ、右之通後家打殺され罷有候、そはニ血之付申候木割斧有之候、則後家所持之斧ニ而御座候、早速親類共・所之庄屋・組頭立合改申候へハ、木綿ぬのこ弐ツ見へ不申候付、盗人之仕わさと存候由申候、右之ぬのこ隠置候者御座候か、又ハ殺手之衣類ニ血付申儀可有之と存、村中屋さかし仕、近村迄諚儀仕候得共、殺手知不申候、後家ニあたをなし可申様成者、心当りも無御座、其外怪敷存候者も無御座候由、後家親類共幷村中之者口書を以申候、為御注進申上候、此上弥諚議仕、相替儀御座候ハヽ、追而可申上候、以上、

元禄拾年丑正月十三日　　太田作之進

御勘定所

先日之御報致拝見候、弥御堅固御勤之由珍重奉存候、竹田村御諚儀者ニ付、御手透無御座由御苦労共ニ存候、然者先比進候口書御一覧被成、洗馬町長右衛門幷穢多彦作口書、佐五右衛門兼而申候通相違無御座、弥御僉儀被成候所ニ相替儀無御座候間、右長右衛門・彦作召籠置候段指免可申旨、得其意存候、此上相替儀も御座候ハヽ、何時も可被仰聞、入御念候、御紙面之趣、役人共へも可申聞候、恐惶謹言、

正月十七日

秋本源五兵衛
藤沼(曾)金太夫
河村介太夫

浅利吉右衛門様

昨十七日之貴札相届致拝見候、

一、旦那御儀弥御機嫌能、一昨十六日飯嶋御発駕、遠州へ御越被遊、直ニ江戸へ御帰之積ニ御座候、

一、竹田村喜左衛門後家被打殺衣類弐ツ被取候出入之儀、弥御僉儀被成候得共、恠敷儀無御座候由、就夫、前方被遣候竹田村ゟ之注進書幷同村中百姓口書ニ、名主兵右衛門名所無御座候旨申進候ニ付、兵右衛門名所御書加、右両通共御書直被遣候間、最前之弐通と引替進候様ニと被仰越候、最前之書物共ハ、不残先日之公儀江御注進書と一所ニ江戸へ被遣候間、江戸ニて見分ケ、重而相返し可申候、

一、其以後御取被成候由之口書共、袋ニ御入被遣相届候、

一、御代官所中連判手形、先日被遣候ニ御金山領無之候ニ付、是又御金山領御書加御取直被遣候、前申候通、是も江戸へ参候間、重而相返し可申候、

一、他領之宿々支配方江書状被遣候ニ付、返状幷其所々之口書共、支配〳〵ゟ参候由ニて、帳ニ御記被遣、是又相届申候、

一、諏訪・松本ニて此方之百姓幷穢多泊り申候宿々、召籠ニ致置候由申参候ニ付、泊り申候者共之申口と、宿々申口相違も無之候上者、恠敷儀も無之候間、召籠御免可然旨、御申遣候由、此方ニても僉儀之時分居合不申候者共、御僉儀被成候所、恠敷儀者無之候得共、所之庄屋へ断もなく他所へ参泊り候之段、兼々被仰付を相背申との儀ニて、手錠御申付候由、此上弥恠敷儀も無之、他領ニて宿仕候者共も召籠赦免被致候者、此方も手錠之者共御免被成可然と被思召候由被仰越候、旦那御儀、御発駕跡之儀ニ御座候故、吉兵衛殿へも相談仕候所、弥恠敷も無之、他領者召籠も免シ被申

候哉、能々御聞届被成候而之上、此方手錠之者共も御免候へ而も、苦ケ間敷と存事ニ御座候、

一、他領支配人方へ宿之儀僉儀被致候様ニと御申越候儀ハ、先御延引被成、贓物之品計御申越、其色之衣類着申者か、又ハ質ニも入売物ニも仕候哉被御心付、恠敷儀在之候ハヽ為御知給候様ニと計、御申遣可被成候旨被仰遣候へ共、其前ニ御状被遣返事共参候由被仰越候、実ニハ宿之儀僉儀無之候而ハ不審晴かたきと思召、書状被遣候由御尤奉存候、

一、村中入札之儀、御穿鑿被成候所、白札之者者無筆、其上恠敷儀不存候間、白札入候由、若胡乱成儀乍存隠置、後日顕申候ハヽ、如何様之曲事ニも可被仰付候旨、口書■（斗）出候由、存寄御座候と書申札主ハ、同村又兵衛世悴弥七郎と申者之由、是ハ存寄無御座候と書可申を無の字落シ候由、尤左様ニも可有之儀ニ候へとも、何とやらんぢんじ申様ニも聞候間、今一応も御僉儀被成、少々者手錠御掛候而も可然候、乍去外へ聞候而恠敷様ニも沙汰可有之哉、其段御了簡被成可然様ニ可被仰付候、

一、江戸へ之飛脚、竹田村之者ニ御申付、十六日ニ御状箱為御持被遣候由、致承知候、

一、蛯江源太左衛門殿へ内証御申越被成候所ニ、隼人正様御耳ニ立、役人方へ被仰付御僉儀御座候由、就夫、御家老中迄も旦那ゟ被仰遣可然由、其外へハ貴様ゟ旦那御意候由、御心得可被仰遣由被仰越候、此段江戸ニて御紙面を以可申上候、

一、後家死骸之儀、何之寺ニて取置申候哉、土葬火葬之わけ先日不被仰越候、此度之口書之内ニ御書候哉、取込見不申候、若御書不被成候ハヽ、重而之儀ニ無御失念可被仰遣候、

一、後家居候家ハ、何間ニ何間之何葺之家ニ候哉、此段も最前不承候、善七・孫兵衛其外近キ家之分絵図ニ被成被遣可然候、麁相成紙ニ黒絵ニても能可有御座候、尤後家年之事ハ、跡之口書御記可被成候由、最前被仰越候間、此度被遣候書物之内ニ可有之と存候、

一、被贓候布子弐ツ之もやうハ、誰存候而恠ニ申候哉、違候而ハ如何ニ候、其見知候者之名も重而可被仰遣候、右之外存知寄も無御座、猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月十八日　　松村仁左衛門

浅利吉右衛門様

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤仕可被成と珍重ニ奉存候、随而去ル比当御料竹田村喜左衛門後家方へ忍入候盗人之儀ニ付、御六ケ敷事申進候所、被入御念御僉儀被成被下候段、太田作之進方へ委申越候、其元ニ而御僉儀之訳も　公儀へ作之進申上候儀ニ御座候、右御礼拙者方ゟ申進候様にと、作之進方ゟ申来候間、如此ニ御座候、恐惶謹言、

正月廿六日　　浅利吉右衛門

三井又左衛門様

人々御中

山口彦右衛門様　是ハ連状ニ而ハ無之、右文言ニ而彦右衛門殿へも書状遣、

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤仕可被成与珍重ニ奉存候、去ル比ハ竹田村盗人之儀ニ付、御六ケ敷事共申進候処ニ、委細之御僉儀共ニ御座候、右之趣作之進方へ先達而委申遣候、御家老中迄御礼可申達と奉存候、拙者儀貴様迄以参上万端可御意候処ニ、彼僉儀之旨趣作之進方迄申越候故、不得寸隙其儀無御座候、近内ニ与風遂伺公、御

礼旁可申上候、随而右之儀ニ付、書物共少し江戸へ越申度御座候而、認為持進上申候、幸便之節於江戸松村仁左衛門・渥美庄右衛門方迄相届キ申様ニ、乍慮外奉頼候、何も期貴面之時候、恐惶謹言、

正月廿五日　　浅利吉右衛門

蛯江源太左衛門様

人々御中

一筆致啓上候、先以　上々様方益御機嫌能被為成御座候半と恐悦ニ奉存候、仁左衛門殿御事、道中御無事ニ其御地へ疾クニ御参着可被成与大慶仕候、随而去ル比飯嶋ゟ被仰下候通、竹田村喜左衛門後家死骸取置申候わけ、後家宅と憐屋（隣）之間数幷絵図・贓物模様之色を申候者、存寄御座候と入札致候者等、僉儀之趣口書取之進上申候、

一、旦那御義、御機嫌能遠州ニ而御樽木御用方、当月中ニ御仕廻被為遊、来月初方ニハ其御地へ御帰館可被遊与乍恐奉察候、此便急キ申候間不能誦候、其内追々可申上候、作右衛門様御前可然様ニ被仰上可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

正月廿五日

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

人々御中

貴札忝致拝見候、先以弥御堅固ニ御勤役被成候旨珍重奉存候、随而去ル比被仰聞候竹田村喜左衛門後家方へ認入（シノビ）候盗賊ノ儀ニ付、白川村長介事被仰付候其趣を以穿鑿仕候品、太田作之進様へ委細ニ被仰遣被下候由、御紙面之趣被為入御念被仰下忝奉存候、公儀へも作之進様ゟ御申上被遊御事ニ御座候由、是又承知仕候、右之段対馬守方へ可申遣候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月廿六日　　諏訪対馬守内

三井又左衛門

浅利吉右衛門様

貴報

貴札忝致拝見候、余寒甚御座候得共、弥御堅固被成御勤仕候由珍重奉存候、然者去ル比被仰聞候竹田村一儀ニ付、自此方申遣候義共、作之進様江被仰上、依之、為御礼被仰下趣忝仕合奉存候、乍憚御序之節宜御執成奉頼候、猶期貴面之時候、恐惶謹言、

正月廿六日　　山口彦右衛門

浅利吉右衛門様

貴報

以別紙致啓上候

一、去ル五日之夜竹田村喜左衛門後家方へ盗人入、後家ヲ打殺シ木綿布子弐ツ取逃申候由訴出候ニ付、貴様早々御出在々御穿鑿被成候得共、殺シ人相知レ不申候ニ付、竹田村庄や・百性幷親類共之口書御取、近村迄御詮儀被成口書御取候而、飯嶋江御住進（注以下同じ）被成候之由、従　旦那御頭様江右之御住進被仰上候ニ付、竹田村源大郎と申者飛脚ニ被遣候、旦那ゟ之御状ハ去ル十三日、貴様之御状ハ十六日之日付ニ而、一昨廿二日之朝到着仕候ニ付、右御住進書之趣致拝見、則松平美濃守様江同日致持参差上ケ置申候、尤旦那ゟも追而相替儀御座候ハヽ可申上之由、御住進ニ而御座候、乍此上相替儀も御座候者、無油断御住進可被成候、被仰下候通時分柄と申、偖々不便千万成事存候、何と歟盗人相知御仕置被仰付度義

ニ御座候、早々ゟ御詮儀御苦労奉察候、　旦那ゟ被仰下候ハ、
御頭様江御住進書指上申候由、其趣貴様へ申遣候様ニと被仰下候、
一、貴様御事、極月廿四日ニ飯嶋ゟ其元へ御帰被成、それゟ御年貢
金御取立、正月三日迄ニ埒明、四日五日帳面御認被成候段、偖々
御太義千万ニ奉存候、然共御年貢金大方埒明申様子ニて、一段之
御事ニ御座候、
一、水内郡ゟも昨日飛脚参申候、相替義無之由之事候間、可御心安
候、
一、先可申上之所、旦那御発駕之儀、当月十八九日比飯嶋御発足
可被遊之由被仰下候、内々ハ最早今明日ニも御着可被遊と奉存候
所、御樽木水細ク御座候而出かね申候由致承知候、何とそ一日も
早ク御仕廻被遊、御機嫌能御帰府奉願候、来月十日比之御着之積
り被仰下候、奉恐悦候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、
　正月廿四日　　渥美庄右衛門
　浅利吉右衛門様

一筆致啓上候、各様弥御堅固ニ御勤仕可被成与珍重奉存候、然ハ作
之進御代官所筑摩郡去ル子御年貢米払直段之義、其御地御城下米相
場上中下三段之直段付を以、御勘定所へ相窺申候、乍御六ケ敷問屋
中へ被仰付、今程之米相場書御取、各様奥書御印形被成可被下候、
奉頼候、恐惶謹言、
　二月六日　　浅利吉右衛門
　河村助大夫様
　蛯江源太左衛門様
　人々御中

一筆致啓上候、先以上々様方益御機嫌能可被為成御座与恐悦奉存
候、旦那御儀、遠州ニ而御樽木御用首尾能被仰付、最早其御地
へ御帰国被遊、御機嫌能可被為成御座と、乍恐目出度奉存候、
一、去子御年貢三分二米払御直段、為御窺之松本町米相場書取之指
越申候、御上ケ可被下候、
一、右御年貢三分一金皆済之儀、来月末方ニ取立指上ケ可申と奉存、
村々へ相触さいそく仕候、
一、竹田村盗賊僉儀口書共取之、先月飯嶋へ為持越申候処、僉議ニ
不足之訳、仁左衛門殿ゟ被仰付候間得其意、則僉議いたし口書取
之、蛯江源太左衛門殿ニ頼候而越申候、相届可申と奉存候、前方
も仁左衛門殿へ申進候通、右盗人之儀ニ付洗馬境松本領之村々も、
　隼人正様ゟ被入御念、役人中へ被仰付御僉議ニ御座候、御家老
衆へ従　旦那右御礼被仰遣候而も可然様ニ乍憚奉存候、諏訪・高
遠役人中へ者、旦那ゟ被仰遣候趣ニ、拙者方ゟ相心得礼状遣し
申候、右盗賊之事如何共しれ不申候、此上相替義も御座候ハヽ、
早々御注進可申上候、
一、松本領板場村と御金山領と内々之馬草場論所幷月沢山にて樋木
取申候ニ付、手木・しや之木御金山領ゟ為取申間敷旨内々申候、
右両様共ニ其御地へ訴訟ニ可罷越と、松本領之者とも去年中ゟ申
候へ共、何とそ内証ニ而相済させ申度候、其趣之相談仕度候、近
日会合仕度旨、水野弥介殿被申候故、可罷成義ニ候ハヽ、内証ニ
而埒明申様ニ仕度旨、挨拶いたし候、末へ寄候へハ農(ノウ)作ニ指掛り
申候間、当月中ニ如何共埒明申積りニ相談被致度由被申候、押付
松本役人中と参会仕、相談可仕と奉存候、様子ニゟ嶋村幸右衛門
も洗馬へまねき不申候而ハ成申間敷と奉存候、其段内々被仰上可
被下候、何とそ内々ニ而相済候へかしと奉存候、

一、井堰川除目論見ニも押付罷出、帳面認当月中ニ進上可仕候、
一、松本役人中黒田軍左殿・早川九兵殿、旧冬ゟ今井弥三左殿ヲ以、拙者ヲ振廻申度由度々書状給候、辞退仕候も何とやらん、勿躰らしき様ニも可罷成哉と奉存候、軍左殿小九兵殿宅へ可参旨返答仕候へハ、松本領今村之忠右衛門と申者之宅ニ而、右両人と外役人衆と参会仕候、内証ハ　隼人正様ゟ之御振廻之様子ニ推量仕候、被入御念御馳走共ニ而御座候、御序も御座候ハヽ、仁左衛門殿ゟ右両人衆へ可然様ニ被仰遣被下候而ハ、如何御座候半哉、右之段不申上候も如何ニ奉存候間申上候、右之通之御馳走ハ、　旦那、隼人正様別而御入魂之義ニ御座候故、双方役人折々参会仕候へハ、御用方之義も互ニ無心置、相談為可仕之義と申様子ニ相聞へ申候、
一、水野久蔵殿跡敷之義、久蔵殿舎弟鈴木六之介殿へ被仰付、鈴木蔵人殿と改り、知行無相違弐千石ニ而立申候、　旦那ニも御存知被遊候ハヽ、御夫者可被遣候へ共、遠州ニ被成御座候而、御存知無御座候、拙者先御祝義ニ参候由申候而、右蔵人殿へ祝義ニ参候、
一、鳥羽屋清左衛門方ゟ年始之為御祝義、書状其外書付入迄参候、則今度水内郡へ誂越申候、内々書状御覧被成候へハ、様子しれ申候、
一、前方申上候拙者参宮之義、当月中ハ罷成申間敷候、御用方埒明次第、来月末方ニ罷立可申と奉存候、内々左様御心得可被下候、何も重而万喜可申上候、　御前可然様ニ被仰上可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

二月九日　　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様

人々御中

尚々、米相場書、当月十五日前後ニ江戸着仕候様ニと、前方仁左衛門殿と申合候、左様御心得可被下候、以上、

一筆致啓上候、先以弥御無事ニ御勤仕可被成与珍重奉存候、此方相替義無御座候、随而去子ノ御年貢三分二米、為御窺松本町米相場書取之越申候、最前申合候通、其元之相場書と一所ニ被成、江戸へ被遣可被下候、若又其元ゟハ被遣候ハヽ、此方直クニ江戸へ持参申様ニと申付候間、其元ゟ直クニ江戸へ被遣可被下候、竹田村盗人之義も如何共しれ不申候、
一、松本領板場村と御金山領馬草場論所之義、去年中ゟ江戸へ訴訟ニ可仕旨、松本領之者共申候へ共、何とそ内証ニ而埒明申度存押置候、此上弥内々ニ而如何様ニも相済申様ニ仕度旨、水野弥介へ参会仕候へハ、物語ニ而御座候故、拙者も御了簡之趣ニ存候、内証ニ而相済候手立了簡之義ハ、如何共存当り互ニ無御座候、去年中大図ハ半分と申扱之様成事、双方ゟ申出候へとも、菟哉角と滞申候、此已後近内参会仕、相談可申と申合候、就夫、乍御太義此方ゟ御左右次第、御出不被下候而ハ埒明不申候間、御出奉待候、其趣江戸へも申上候、内々左様御心得可被下候、折節取込罷有候間、不能待候、恐惶謹言、

二月九日　　浅利吉右衛門

嶋村幸右衛門様

人々御中

尚々、河村助大夫方へ御伝書為申聞候所、忝候由申候、以上、

御手紙致拝見候、弥御堅固ニ而御勤役被成珍重奉存候、当町米相場書可進之由、則只今町米上中下直段書付進申候、御覧可被成候、以

上、

二月八日　　蛯江源太左衛門

浅利吉右衛門様

米之相場書

一、上米金壱両ニ付　壱石四斗四升
一、中米金壱両ニ付　壱石五斗六升
一、下米金壱両ニ付　壱石七斗壱升

三口米合四石七斗壱升、但、金壱両ニ付米均テ壱石五斗七升

右者、信州松本町米売買唯今之直段、如此ニ御座候、以上、

元禄十丁丑年二月七日　　問屋　七郎左衛門印
名主　六右衛門印
同　仁右衛門印
同　伝七郎印
同　善右衛門印
同　五左衛門印
同　平兵衛印

右之通、相違無御座候、以上、

水野隼人正内
蛯江源太左衛門印
川村助大夫印

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤可被成与珍重奉存候、去ル頃ハ緩々と得御意、大慶奉存候、然ハ御料反町村と当領板場村論所御相談之儀、来ル十四日五日ニ当町か又ハ北栗林村庄左衛門方ニ而御出合申度候、弥御出可被下候、左候へハ嶋村幸右衛門殿へ可被仰遣候哉、重而御出合之節御相談相調候様ニ願存候、兼而幸右衛門殿御出合可被成与被仰付候故、如此御座候、恐惶謹言、

二月九日　　水野弥介

浅利吉右衛門様

貴札致拝見候、如仰、先日者緩々得御意、殊ニ色々御取持御懇意之段忝奉存候、其節被仰候御金山領と板場村と馬草場出入之義、来ル十四日五日ニ御参会仕可致御相談候旨、被仰聞得其意奉存候、日外少々了簡之趣御物語仕候、右出入内証ニ而何とそ和談為申度(致)申度様子有之候間、此方ゟ一左右次第洗馬迄参相談被致候様にと、嶋村幸右衛門方へ昨朝幸便御座候間申遣候、於江戸ニ松村仁左衛門方へも少々昨朝申遣候、先日早々御相談仕候間、御一左右を承候而委細幸右衛門方へ申遣、幸右衛門此方へ参着之日限も相究、何れも様と御参会仕、指問無御座御相談調申候者、双方論人共御召寄相談之わけ為申聞、其上彼場所ニて立合申、双方之百姓共をも相究、何とそ内証ニて埒明申様ニ仕度奉存候、明日水内郡幸右衛門方へ飛脚遣、返事次第ニ御参会之日限相定、貴宅か山田小平次殿か又ハ岡田町辺御金山領へ成り共御参会仕、緩々と可得御意と奉存候、何とそ内々ニて相済申様ニ御相談相調申度奉存候御事、期後音之時候、恐惶謹言、

二月十日　　浅利吉右衛門

水野弥助様

貴報

一筆致啓上候、弥御堅固可被成御座と珍重奉存候、一昨日飛脚ヲ以申上候、相届可申と奉存候、先書ニも如申進候、内々御存知被成候松本領板場村と御金山領反町村と馬草場出入之地、如何共埒明不申

鎌留ニ罷成居申候、依之、松本領之百性方ゟ江戸へ訴詔可仕旨、去年中水野弥助殿迄詔申(訴、以下同じ)候得共、何とそ内証ニ而相済可申了簡も有之候ハヽと被存、江戸へ詔可申と申義先延引為致被申被成候ニ御座候、去ル比松本役人中と参会仕候、其刻弥助殿共出合申候、彼烈(列)座ニて弥助殿被申候ハヽ、右出入之義如何共埒明不申、彼場所へ入方之松本領之村も迷惑仕候、然共、江戸公事ニ罷成候義ハ互百性難義有之、此出入内証ニて埒明可申手立ハ御座有間敷候哉、先年半分ツヽと申扱之わけ双方相談仕候得ハ、境之所ニて埒明不申候、此上内々ニて相済可申了簡存寄ハ無之候哉と被申候故、指当り存付も無御座候、併幸右衛門抔と相談仕、内証ニて落着可仕義も若有之候ハヽ、何れ茂様と御参会いたし、御相談仕度奉存候、当分拙者存寄ニハ、前方馬草場論所半分ニ割、互ニ入申積りニ手立双方ゟ申出候得共、右之通ニ滞申候、指問可有御座ハ不存候へ共、先存候は彼論地ヲ松本領ハ嶋立組ゟ百性出し、此方ハ和田八ヶ村ゟ百性出し、右両所之百性出合神文いたし、両方無依怙様に等分ニ仕候積りニ為致、方角之割様ハ先年申出候通りニ為仕可申候、其節又々境目之所ニ而滞可申候、其時分ハ松本ゟ両人役人出、此方ゟハ貴様と私両人出、双方四人致神文、無贔屓様ニ滞候境目ニて扱之指図之様ニ仕、論所へ両方ゟ五七日も罷出候ハヽ、埒明可申哉と、早速なから尽意之趣相述候へハ、連座之衆中何も尤之様ニ被申候、依之ニ、弥助殿ゟ右相談仕度旨書状到来仕候、拙者方ゟも返事仕候、則進状・返状之写シ掛御目候、余寒も甚敷と申、遠方と申旁以御太義千万ニ奉存候へ共、来ル十四日五六七八日之内迄ニ御出、此方ニ五七日も御逗留之御心掛ケニて、必々御出奉待候、貴様御出無御座候而ハ埒明不申候、必々御出奉待候、其わけ江戸へも先日之便ニ申上候、此方へ御出御相談之上指支も御座候而、埒明不申分ハ是非及不申候、必々御出可被下候、御出之日限被仰下候ハヽ、弥介殿へ一左右可申入候、委ハ御報ニ可被仰下候、恐惶謹言、

二月十一日　　浅利吉右衛門

嶋村幸右衛門様

尚々、遠方御太義ニハ奉存候へ共、必々御出奉待候、右出入相談可申と弥介ゟ被申候事ヲ、否を申とも難申義ニ御座候間、必々奉待候、前々ゟ大境目之論所之義ニ而ハ無御座候、其段者大論之義ニ御座候へハ、少々ニハ双方ゟおこり申間敷哉と推量仕候、板場と反町論所其まヽ指置申候ハヽ、大境目之論共におこり可申かと存候故、何とそ内証ニて埒明可申義ニ御座候ハヽ、相談仕度事共と奉存候、とかく御出奉待候、以上、

口上

一、御金山領と板場村馬草場論所之義、とかく貴様御出不被下候てハ、拙者計之了簡万端無覚束奉存候、彼論所ハかりしき山之義ニ御座候間、三月中ニ如何共相済候へハ能御座候、三月御出可被下候、貴様御指合故右相談之参会延引可給候旨、水野弥介へも申越候、江戸へも申上候、拙者儀ハ来月朔日比ニ発足、伊勢へ参宮可仕と存候、何ニ而も御用むきハ貴様へ可申上旨申置候、内々左様ニ御心得可被下候、御在所へ御出御留守ニ而御座候半と奉存、早々申上候、以上、

二月十七日

尚々、幸右衛門書状ハ、此方へ御返し可被下候、以上、

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤仕可被成与珍重ニ奉存候、日外ハ書状進申候、相届可申と奉存候、拙宅無事ニ罷有候、随而板場と御金

山領と論所之儀、日外今村ニ而御聞被成候通ニ、少々御相談仕候処、水野弥介殿先日被仰聞候ハ、今日時分御参会御相談可被成由ニ御座候へとも、拙者計御参会仕候而、又先日之通ニ御座候故、重而御参会仕候ハヽ、御相談相究候、早速如何共埒明申候様ニ可仕与奉存候、其趣弥介殿へ先比申進候キ、菟角同役ヲ招其御地御役人中と御参会仕、相談不仕候而ハ了簡難仕御座候、拙者一人ニ而ハ作之進存候処も御座候故、嶋村幸右衛門立合申様ニと、前方幸便ニ幸右衛門方江申遣候へハ、得其意申候、弥介殿ゟ御状被下候間、已後飛脚ニ而右之わけ水内郡江申遣候へハ、幸右衛門老母死去故、此度ハ此方へ参候事延引ニ罷成候、右論所かりしき前ニ如何共埒明候へハ能御座候間、三月初方ニ幸右衛門おもまねき、何も様と御参会仕御相談仕度存候、最前も江戸へ右論所之儀申越候、幸右衛門不参故三月迄相談相延仕候わけ、明後日便御座候間、江戸へ又候可申遣と存候、右之趣弥介殿へ可申遣候得共、入組申候わけ又ハ幸右衛門方ゟ参候紙面も御覧不被成候而ハ、御合点参申間敷候、貴様御合点被成、弥介殿へハ乍御六ケ敷御物語被成被下、御了簡之趣御報ニ被仰聞可被下候、幸右衛門方ゟ之紙面ハ、弥介殿へ御披見ハ御用捨可被下候、乍御六ケ敷弥介殿へ御通可被下候、奉頼候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

二月十五日　浅利吉右衛門

山田小平次様

一筆致啓上候、先以上々様方益御機嫌能可被成御座与恐悦奉存候、此方御代官所中相替儀無御座候、

一、当丑ノ春、井堰川除御普請御目論見帳認越申候、御上ケ可被下候、扨又、竹田村後家セかれ権六、其御地材木町ニ奉公致罷有候処、母仕合ニ付通ニ此元へ罷越、拙者方へも参候間、後家盗人ニ被打殺候刻、諚儀ニ不足之儀も有之哉、存当りも候ハヽ、有躰ニ可申旨為申渡候へハ、何ニ而も存寄も無之、僉儀之わけ忝候由申候間、其趣口書為致、則進上申候、右権六も御屋敷へ伺公可仕旨申候、

一、先日松本町米相場書、藤兵へ水内郡へ誂越申候、相届可申と奉存候、其節申上候松本領板場村と御金山領馬草場論所之義、双方鎌留ニ而罷有候、江戸公事ニ為致候も、両方百性困窮ニ罷成候事ニ有之間、何とそ内証ニ而埒明申様ニ相談仕度旨、水野弥介被申候、尤之了簡ニ御座候間、双方役人中参会仕、当月中ニ如何とも埒明申様ニ可仕と、弥介共申合候、左候へハ、拙者一人計松本役人中と参会いたし而も、了簡無覚束御座候故、嶋村幸右衛門と私両人此方ゟ罷出、松本役人中も両人出合相談相究、内証ニ而落着仕候積りニ可仕哉と、幸右衛門方江右之趣申遣候処、立合可申旨申来候、参会之日限弥介ゟ申来候故、幸右衛門方江其段申越候処、老母死去故洗馬へ参候事延引ニ罷成候、右出入ハかりしき山之義ニ御座候間、来ル三月中如何共埒明申候へハよく御座候故、三月迄右相談之参会延引可給旨、山田小平次殿迄委申越候、弥介へ御申通候様ニ頼入越申候、延引仕ニ而可有御座候、三月ハ弥幸右衛門も洗馬へ彼相談ニ参会申様ニ、其御地ゟも便次第ニ被仰遣可被下候、

一、右之通ニ御座候ハヽ、当分指当り申御用も無御座候間、内々申上候通、伊勢へ参宮仕度奉存候、当月ハ見合、来壬二月初方ニ此許発足可仕候間、内々左様御心得可被下候、右之趣　御前可然様ニ被仰上可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

二月十六日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様
人々御中

宗門改帳・五人組幷万小入用帳、壬二月廿八九日比ニ相改可申候、内々被得其意、帳面共認可被申候、小入用帳ハ下帳出来次第、今井村へ持参可有候、以上、

二月十七日　浅利吉右衛門

洗馬・御金山村々十七ヶ村へ相触也、

未得御意候得共、一筆致啓上候、随而太田作之進御代官所信州筑摩郡和田村之貞右衛門・清兵衛と申者之方へ、御支配所奈良井町義右衛門と申者、同町之半三郎ヲ以、去亥ノ春申候者、木曾山御注文山ニ致付、杣飯米ニ仕度候間、延金ニいたし籾売くれ候様ニと右町半三郎と申者ヲ以去亥ノ春色々申ニ付（之義ニ有之候故）、証文為致、籾相渡し、右代金請取申時節ニ罷成候故（間）、籾代金請取可申皆、断いたし候処滞相済不申候故（二付）、度々催促いたし候へ共、尓今埒明不申、迷惑仕候由ニ而、貞右衛門・清兵衛訴状指出し申候、則訴状を上申候、御披訴状を上申候、彼証文共御吟味之上、可然様ニ被仰付可被下候、委ハ右両人之者共口上可申上候、恐惶謹言、

壬二月■日　太田作之進代

浅利吉右衛門

三村与五左衛門様
人々御中

去ル九日之貴札、水内郡へ被遣置候由ニて、今十七日彼地ゟ相届キ致拝見候、其元相替儀無御座、御無為ニ御勤被成候、珍重奉存候、旦那御儀未御帰府不被遊候、遠州舟明へハ先月十九日ニ御着、御樽木山様御仕廻（カ）万高御改候所、川長ヶ紛失木五万四千五百廿三丁有之ニ付、大分之紛失故、彼地ニ御逗留被成、両川端村々へ、三左衛門様ゟ和田元右衛門・太田良伴助、此方ゟ内田瀧右衛門・薬袋七郎兵衛御僉議ニ被遣候、就夫、何比御帰り可被遊も然と相知不申候、大方当月中ニハ御座有間敷と存候、七郎兵衛殿御太義存ニ存候、嘸貴様ニも無御心元可被思召と存候、爰元ハ留守中上々様御機嫌能被成御座候、

一、去子御年貢三分二米御直段、為御窺松本米相場書、御取被遣相届申候、

一、竹田村喜左衛門後家殺候者、尓今相知不申由、就夫、隼人様被入御念、役人中被仰付御僉義被遊候間、重而　旦那ゟ右御礼被仰遣候而可然由、諏訪・高遠役人中へハ、貴様ゟ御礼状被遣候由、何茂御紙面之通御帰府之時分可申上候、右御諚議ニ付御取紛之口書幷後家家近所之絵図等、御状御添先比海老江源太左衛門殿へ御頼之由、何茂無相違此方へ相届申候、

一、松本領板場村と御金山領と馬草場論幷月沢山ニ而樋木取申義ニ付、江戸へ御訴訟ニ松本領之者去年中ゟ可参由申候へ共、何とそ内証ニ而相済させ度由ニて、近日水野弥助殿御参会被成筈之由被仰聞、就夫、嶋村幸右殿其元へ御まねき被成度思召候間、内々其段　旦那へ申上置候様ニと、御紙面之趣御帰之節可申上候、

一、井堰川除目録帳、当月中御越可有之由致承知候、

一、松本御役人中幷山田小平次殿御出合、松本領今村忠右衛門宅ニ而御振舞御座候由、内証ハ　隼人様ゟ御馳走と思召候由、就夫、仁左衛門方ゟ軍左殿・九兵へ殿へ礼状遣し可申哉之由被仰越候、是又　旦那御帰之時分　御下知得可申と存候、

一、水野蔵人殿へ祝義ニ貴様御出、旦那御存候ハ、御使者可被遣候へ共、遠州ニ御入候故無其儀候由、御挨拶被成候由令承知候、恐惶謹言、

二月九日　　渥美庄右衛門
　　松村仁左衛門
浅利吉右衛門様

一筆致啓上候、先以　上々様方益御機嫌能可被為成御座と恐悦奉存候、此方御代官所中相替儀無御座候、拙者義内々申候通、当月二日ニ発足伊勢へ参宮仕、去ル十六日ニ今井へ罷帰候、御暇被下置念願相叶難有仕合奉存候、御序之刻可然様ニ被仰上可被下候、

一、去ル子御年貢三分一半納皆済金、当月末方か来月節句前後ニ其御地参着仕候様ニ催促仕候、押付ケ才料越可申候、其節委可申上候、扨又、子之御口米例之通御延金ニ村々百姓願申候証文認させ、才料罷越候刻上ケ可申候、右之趣可然様ニ御披露奉頼候、恐惶謹言、

壬二月十九日　　浅利吉右衛門
松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様
　人々御中

当丑宗門改・五人組・村々小入用帳之義、来ル廿九日ニ相改可申間、被得其意、内々旦那寺へ通置、右日限ニ出家衆今井村へ同道、判形相調可被申候、五人組帳之肩書ニ持高去年之通書付ケ可被申候、

一、先日も申触候通、去子御年貢三分一半納皆済金、来ル廿六日ニ今井村へ持参相納可申候、必遅納有間敷候、不及申候へとも、三分一金分不足納ハ堅ク成不申候間、其心得可有候、尤才料相究可被申候、廿七八両日之内ニ江戸江御金遣候間、油断有間鋪候、以上、

壬二月廿日　　浅利吉右衛門
岩垂・大池・小坂・竹田・荒井・衣外・境・下和田・中村・和田町村・殿村・南和田・下今井・上今井村　右村々名主中

追而此書付ケ披見之名主、村下ニ印判致相廻し、末之村ゟ序次第持参返し可被申候、以上、

如此訴状指出候、内証ニ而可相済義ニ候ハ、埒明ケ可申候、滞義有之候ハ、為致返答書、此書付ケ之者共召連、来ル廿四日ニ御用屋敷へ可被参候、諭議可申候、以上、

丑壬二月廿一日　　浅利吉右衛門
　　今井村
　　名主　与左衛門
　　同　新　助
　　吉左衛門
　　安之丞
　　吉兵衛
　　才右衛門
　　孫七郎
　　組　頭
　　長百姓　中

尚々、御金山領四ヶ村五人組帳認様、悪敷御座候而返し申候故

出来不申候間、此度越不申候、重而便ニ越可申候、可然様被仰上可被下候、

一筆致啓上候、先以　上々様方御揃御機嫌能可被為成御座と恐悦ニ奉存候、此方御代官所中相替義無御座候、

一、旦那御儀、先々月中ニ其御地へ御帰館可被遊と奉存候所、流失御樽木之義ニ付、遠州ニ久々御逗留被遊、先月中旬比ニ江戸御着被為遊之由、奉承知候、久々彼地ニ被為成御座、御苦労共ニ乍恐奉存候、御序之刻可然様ニ被仰上可被下候、

一、去ル子之御年貢三分一金之内、旧冬納残り之分三百四拾七両弐分、去亥ノ御年貢金納下り之分七両三分・永百拾三文、都合三百五拾五両壱分・永百拾三文取立、今井村金兵衛・次右衛門、下和田村次郎右衛門、右三人之者共才料ニ而御金指越申候、御請取被成御上ケ可被下候、村々金納通帳共も進上申候、御印判被遊被下候様ニ被仰上可被下候、村毎御金納高別紙ニ書付ケ上ケ申候、先月中ニ右金指越可申と随分催足仕候へとも、当春世上殊之外指詰り難儀ニ相見へ、御金遅納仕候故延引ニ罷成候、

一、去ル子之御口米、例年之通御延金ニ村々百姓奉願候、依之、願書上ケ可申所、跡々之案紙当分見へ不申候、去年之願書幷証文其御地ニ御座候を、此者共ニ被遣可被下候、為認重而便ニ上ケ可申候、扨又、川除目論見帳先月越申候、相届可申と奉存候、拙者伊勢ゟ罷帰候以後、松本ゟ之便ニ書状進上申候、其節参宮仕候御暇之御礼申上候、御序之刻可然様ニ御取成奉頼候、

一、中村之去亥御年貢金納下り之分七両三分・永百拾三文、此度指上ケ申候、皆済目録之義ハ、旧冬仁左衛門殿へ進置申候、御うら書ニ御印判被遊被下候様ニ被仰上可被下候、

一、宗門改・五人組・村々小入用帳相改申候間、五人組・小入用両帳共ニ指越申候、御上ケ可被下候、

一、松本領板場村と御金山領と馬草場出入之儀ニ付、松本役人中と幸右衛門・吉右衛門出合申義、当月末方ニ参会之筈ニ御座候間、来ル十日比ゟ井堰川除御普請ニ取懸可申と奉存候、

一、拙者手前当年ハ別而不勝手之様ニ御座候、拝借金三両奉願候、則手形認進上申候、可然様ニ被仰上、拝借仕候様ニ奉頼候、相叶不申候ハヽ、手形御返可被下候、万喜追々可申上候、恐惶謹言、

三月七日　　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様

人々御中

尚々、頃日ハ梓沢川筋井堰御普請ニ罷出候、内々ハ今日ハ井口へ可罷越奉存候処ニ、天気悪敷、井口寒ク人足働不自由ニ御座候故、延引仕候、日和次第、明十五日早朝ニ右場所へ罷出可申と奉存候、■■■■以上、

一筆致啓上候、其已後者御物遠ニ奉存候、弥御堅固ニ御勤仕可被成与珍重奉存候、随而洗馬御料竹田村之勘三郎と申者之馬、一昨十二日ニ牧ニ繋置申候処、放(申候間、方々)御方へ参候もしれ(ハ)不申候故、近村相尋申候へ共、見へ不申候旨、注進仕候、右馬栗毛之男馬、午房ニ而年ハ拾歳余ニ罷成候由ニ御座候、若御支配所之内へ参候ハヽ、(一左右被致給候様ニ庄屋中へ)乍御木ケ敷被仰付可被下候、乍御六ケ敷奉頼候、恐惶謹言、

三月十四日　　浅利吉右衛門

黒田軍左衛門様
濱崎八左衛門様
濱崎八左衛門様

人々御中

竹田村勘三郎馬、一昨十二日ニ牧ニ繋置候所放何方へ参候もしれ不申候、依之、近村相尋候へ共、不見候由、右村庄屋以(申カ)来候、彼(彼)馬小右ハ栗毛・男馬・午房ニ而、拾歳余ニ有之由ニ候、此馬見出申者候ハヽ、可被申来候、以上、

三月十四日　浅利吉右衛門

衣外村・荒井村・境村・下和田村・中村・和田村・殿村・南和田村・小坂村・大池村・岩垂村・下今井村・上今井村　右村々名主中

追而此書付、披見之名主村下ニ印判いたし相廻し、末之村ゟ序之刻持参返し可被申候、以上、

一筆致啓上候、随而竹田村勘三郎放馬之義、昨日(先刻)申進候処、見出申し候由、只今申来候、御事多御中へ御六ケ敷儀申上候、何茂期貴面、万々可得御意候、恐惶謹言、

三月十四日　浅利吉右衛門

黒田軍左衛門様
濱崎八左衛門様
人々御中

尚々、不及御報候、以上、

乍恐以口上申上候御事

一、当村惣兵衛と申者田地売渡シ申ニ付、半兵衛・左之助方へ加判致候へと申参候、其ニ付弐人者申様ハ、本役ニ相定申候かと承候へハ、半役ニ而御座候と申ニ付而、弐人者申様ハ、右之本役ニて無御座候、判仕間敷と申候へハ、庄屋壱人判ニて中村之九左衛門ニ売申ニ付而、半兵衛・市郎右衛門、九左衛門方へ断ニ参候へハ、慥成手形ニて買申上ハ、一札次第半役可仕と申候、是ハ清右衛門肝煎ニ而半役ニ売渡し申候、右より(ヨリ)本役ニ而御座候所ヲ、ケ様ニ相渡シ申所、惣百姓迷惑ニ奉存候、是ハ代々本役ニ而御座候所ヲ、半役と申売候へハ、直段も高直ニて御座候間、半役ニ売渡し申候、惣兵衛義、九年以前ニ松本御家中へ御奉公ニ罷出候時、惣百性方へ惣兵衛わひ申様ハ、我等女房壱人宿ニ罷有候間、中間中へ半役ニ一両年御免可給と申ニ付、百性申様ハ、左も候ハヽ、御年貢金子ニ奉公仕候故ハ、其内ハ免シ可申と相談仕候、惣兵衛奉公引込申迄半役ニ仕候へハ、御竿以後庄屋長左衛門・惣百姓、惣兵衛方へ断仕、右之本役ニ当春迄相勤申所ヲ、清右衛門何角惣兵衛方へ申、九左衛門ニ半役ニ売渡し申候、此儀半役ニ仕候へハ、残り之小百姓段々半役ニ罷成度由申ニ付而、相残之百姓迷惑ニ奉存候、御役之儀ハ、御大節之御役ニ御座候へハ、半役ニ仕事、惣百姓難儀ニ罷成申候、乍恐被分御聞召奉仰御事、

元禄十年　和田町村
丑三月日　惣百姓
御代官様

如此口上書面指出候、内証ニ而可埒明義ニ候ハヽ、相済可被申候、滞事有之候ハヽ、僉儀可申候間、清右衛門・九左衛門ニ返答書為致、此書付之者共、来ル廿七日ニ、今井村御用屋敷へ可罷出候、以上、

丑三月廿二日　浅利吉右衛門

和田村名主
惣百性

清右衛門
半之助
彦八郎
惣兵衛
中村　九左衛門

尚々、現金米半分ハ野口甚八郎請負仕候間、断次第御渡可被成候、半分ハ百姓払ニ被仰付候間、例之通金子御請取米御渡し可被成候、御金山領分ハ不残百姓払之積ニ御座候間、左様御心得可被成候、以上、

御金才料者ニ被遣候御状、相届致拝見候、弥御無事ニ御勤被成珍重ニ奉存候、爰元別条無之、　旦那様・上々方様御揃御機嫌能被成御座候間、可被御心安候、

一、二月九日之御状、壬二月十九日之御状、日根野儀兵衛殿ゟ相届、此方之御状、何も致拝見候、

一、遠州御用御仕廻、壬二月十七日之晩御帰府被成候、七郎兵衛殿ハ奥(興)津ゟ御在所御暇被遣候、定而此節其元ニ可被成御座哉と存事御座候、御在所ニ而緩々御逗留、御家普請なと可被成と、貴様御満足被成候由、頃日之御状被仰越、則　旦那へ御礼之趣申上候、

一、竹田村盗賊御全義(詮)之口上書、御取残シ之分御取、蛯江源太左衛門殿御頼被遣候由ニ而相届申候、就夫、松本御家老衆へ　旦那ゟ御状被遣可然由、被仰越候通申上候故ニ、夫ニハ及申間敷由被仰候、

一、松本領板場村と御金山領出入之義、何とそ内々ニ而相済候様ニと、水野弥助殿、貴様ニも御同前ニ思召候ニ付、嶋村幸右衛門殿御立合候而、御相談可被成と思召候所ニ、幸右衛門殿御指合ニ付御延引、当月末方御寄合可被成候間、幸右衛門殿御立合候様ニ可申遣候由被仰越候得共、其後便無御座候、然共其元ゟ被仰遣候ハヽ、御越可有と存候、頃日ニ便有之筈ニ候間、左候ハヽ、此方ゟも可申遣候、

一、黒田軍左殿・早川九兵衛殿御振廻ニ御逢候由、内証ハ　隼人様ゟ之御馳走之由、就夫、拙者共方ゟ御家老衆迄、御礼申上候而も可然様ニ思召候由被仰越候、其段も　旦那へ申上候へハ、其後儀兵衛殿へ御逢被成候節、御礼御申候由ニ御座候、

一、内々御望之通御参宮被成、無恙御帰宅之由、目出度奉存候、

一、鳥羽や清左衛門方ゟ為年始之御祝義、書状幷かわたひ披露仕候、其外伴右衛門・仁左衛門方へ扇子相届申候、七郎兵衛殿へ参候扇子ハ、佐久郡へ遣し置申候、

一、去子ノ三分一金之内、三百四拾七両弐分幷亥未進金七両三分・永百拾三文、都合三百五拾五両壱分・永百拾三文相届申候、両替屋へ相渡候所ニ、右之内金五両悪金御座候ニ付、相返し申候、左候得ハ村々通付かたく候ニ付、御手形遣し候、右悪金引残三百五拾両壱分・永百拾三文之内、七両三分・永百拾三文ハ、中村亥未進金之由ニ付、皆済目録ニ御判形取、此度指越申候、三百四拾弐両弐分之手形被遣候間、重而現金米代被遣候節、右五両金幷御手形可被遣候、其節米代と一度ニ御通ニ付可申候、依之、村々通返進いたし候、中村通ハ此方へ取返シ置申候、

一、宗門改帳・五人組帳・小入帳(用・脱)御改候由ニ而、五人組帳被遣相届申候、

一、貴様当御切米之内、三両御請取被成度由ニ而、御手形被遣候、其段申上候処ニ、当年ハ御参宮なとニも御金入可申と御意被成、御借被成候間、右悪金五両御取立候内ニ而御引取、重而現金米代

被遣候時分、御差引被成可被遣候、依之、貴様三両之御手形此方ニ指置申候、

一、竹田村後家悴権六口書相届申候、其後権六義屋敷江参候而、庄右衛門逢申候、

一、御金山領五人組帳ハ、重而可被遣候由承知仕候、

一、去子御口米、例年之通延金ニ百姓願候ニ付、願書幷手形此方ニ御座候ヲ、指越候様ニと被仰越候へ共、此方殊之外取込、尋候事成不申候間、御覚之通願書計先達而可被遣候、手形御取可被成と旦那被仰候ハヽ、願書被遣候時分、安(案)文進可申候、直段之義、去年も申進候外、郡ゟハ其元ハ安ク御座候歟と覚申候、御心ヲ被付御尤存申候、

一、去子ノ三分二米御直段相極り候ニ付、御書付被遣候、其元相場存之外下直段ニ被仰付、百姓中仕合ニ御座候、当地米相場殊之外高直之時分故、様々御諭儀御座候所ニ、色々御申分ケ被遊候ニ付相済申候間、其通百性中へ御申聞可被成候、

一、松本ゟ御あつらい之せん幷御はなかミ参筈ニ御座候、内々御聞被成候ハヽ、此度御金飛脚ニ被遣候へハ能御座候所ニ、御存知無之故と存候、兼而山田小平次殿迄御相談可被成ハ、右膳・はな紙之義、松本ゟ付合ニ被成候而被遣候共、又ハ其元ゟ馬便り御座候ハヽ、御聞立候而被遣候様ニ御相談被成置御尤ニ候、松本ゟ付合ニ参候而ハ、そんし候事も可有之候日ハ其元ゟ御念御入、其元ゟ之馬便りニ被遣候様ニ可被成候由、御意ニ御座候、

一、薬袋七郎兵衛殿ゟ去比被遣候御状、此度之金飛脚ニ相渡申候、其元ゟ被仰遣候通、岩村田ニ而惣七殿へ渡シ置候様ニと申付候、

一、其辺ニ而れいし御見合被成候ハヽ、御求候而被遣候様ニと被仰候、其辺ニ而ハさいわい竹と申様ニ覚申、又まんねん竹とも申由ニ候、

一、当春御普請之目論見帳、去比被遣相届候、追付御窺相済候ハヽ、自是申可進候、猶万喜追々可得御意候、恐惶謹言、

三月十九日　　松村仁左衛門
　　渥美庄右衛門

浅利吉右衛門様

御報

信州筑摩郡子御年貢三分二米御払直段窺事

一、米千六百拾八石壱斗三合　　筑摩郡

此訳

七百八拾九石五升壱合　　現金　商人
　　百性　払

但、金壱両ニ壱石四斗四升替

是ハ、近所・松本上米相場ニ而御座候、現金払米之内、半分ハ伊奈郡飯嶋雑木山柮飯米ニ買上申度旨、雑木山請負人奉願候、半分ハ百性払ニ被仰付被下候様ニと、所之者奉願候、筑摩郡ハこほれ米ニ而御座候間、松本相場ハしい穀之直段ニ而御座候間、三升安ニ被仰付被下候様ニと、請負人願候へ共、松本しい穀之上米直段金壱両ニ壱石四斗四升替、商人・百姓払共ニ被仰付可然奉存候、

外弐拾石　　川除人足御扶持方大積り

八百九石五升弐合　　延金払

但、金壱両ニ壱石四斗壱升替

是ハ、去子御年貢三分一金納被仰付候、残三分二米、半分ハ現金払、半分ハ百姓為夫食、当秋迄延金払ニ被仰付可然

奉存候、延金払もこほれ米之義ニ御座候へ共、松本上米直段三升高之積り、金壱両ニ壱石四斗壱升替ニ被仰付可然奉存候、

右之通被仰付候間、被得其意、御年貢御取立可被申候、以上、

元禄拾年丑三月　　作之進

浅利吉右衛門殿

其後者御疎敷罷過候、弥御堅固ニ御勤可被成与珍重奉存候、随而作之進方ゟ貴様へ、はな紙と膳ヲ御頼誂申候由ニ江戸ゟ申来候、右膳出来江市(申候ハ、)へ被遣候ハヽ、御左右被成可被下候、五月末方ニ御金才料之者、江戸へ参候間、其節はな紙(右二色)・膳者越可申候、然共能附合之荷物も御座候而、被遣被下候ハヽ、何分ニも可然様奉頼候、いつれにても御左右乍御六ケ敷奉頼候、

（落丁あるか）

三月廿六日　　浅利吉右衛門

山田小平次様

（印）

元禄十年丑ノ三月廿七日

前々ゟ之印判紛失いたし候間、向後此（印）印判用申候、

大池村弥兵衛（印）

一筆致啓上候、先以奉初　旦那を上々方様御揃、御機嫌能被為成御座候由恐悦奉存候、

一、去ル子ノ三分一金三百四拾七両弐分取立上ケ申候内、悪金五両御返し被遊、残三百四拾弐両弐分之御手形被遣請取申候、右悪金出申候故、村々金納通帳ニ御印シ難被成御座候由ニ而、右御手形被下候趣得其意奉畏候、悪金を百性共方へ相渡し、能金を五両請取可申ヰ、其内ニ而拙者奉願候拝借三両金請取、現金米取立之刻差引可仕候、依之、拙者進上申候手形御留置可被遊候旨、相心得奉存候、残弐両之悪金百性方ゟ能金請取、現金才料ニ持セ上ケ可申候、拝借相叶難有奉存候、御次而之刻、可然様ニ被仰上可被下候、

一、去ル子ノ三分二米御直段相究御書付被下拝見仕候、御紙面之趣村々百性共方へ委申聞候、下直ニ御直段被下置候儀、偏　旦那御慈非(悲)と難有奉存候由、何も拙者方迄申上候、御次而之節、是又可然様ニ被仰上可被下候、右三分二米之内現金米、半分ハ野口甚八郎御請負仕候間、断次第右半分之積り甚八郎手代方へ相渡シ可申旨、相心得奉存候、半分ハ百性払ニ被仰付候由、御金取立例之通、来ル五月中ニ御金差上ケ可申候、

一、御金山領当丑之五人組帳、例之通四ヶ村一冊之(ニ)認差出し申候、此度越申候、御上ケ可被下候、

一、子ノ御口米代金、当丑ノ十月迄御延金ニ御取立可被下置之旨、村々百性共願書越申候、様子御披見被成御上ケ可被下候、

一、松本領板場村と御金山領と馬草場出入、双方役人達(立合)江相談可仕儀、先月末方ニ寄合申節ニ御座候処、松本役人中隙入有之由ニ承申候故、尓今参会不仕候、出合申節ニ御座候ハヽ、嶋村幸右衛門方へ可申越候、将又、山田小平次殿ニ御誂被成候御客膳幷御鼻紙、其御地へ越可申義、小平次殿と相談仕能様ニ可仕候、太方五月末方御金才料之者ニ越可申候、内々左様ニ御心得可被下候、

一、れいし見逢申候ハ、、求候て上ケ可申旨被仰下候、大池村武兵衛（右衛門）所持仕候を、右村名主弥兵へ才覚ニ而、武兵衛（右衛門）上ケ申候、被仰下候通万年たけ、さいわいたけ共申由ニ御座候、如何ニも無紛れいしニ而御座候、稀御座候ものゝよし、大切ニ御座候間、御金才料参候刻、箱ニ入損シ不申候様ニ仕指上ケ可申候、又候御用ニ御座候哉、可有御座ハ難計御座候へ共、心掛ケ求可申候、わけ御報ニ可被仰下候是又、

一、当春井堰川除御普請目論見帳、御窺相済候ハヽ、此御報ニ可被仰下候、勘定帳相究申度奉存候、

一、竹田村乱気喜左衛門去ル朔日ニ相果申由、右村名主・組頭訴来候間、早速彼地へ参死かい相改、村中之もの共諚議之上証文取置申候、注進書・右証文共ニ弐通袋ニ入越申候、わけハ証文ニ御座候間略シ申候、死骸ハ則喜左衛門屋敷ニ土葬ニ申付置候、右喜左衛門儀ハ、当正月被打殺申候後家継子ニて、喜左衛門父之名も喜左衛門と申由ニ御座候、去ル正月僉議之刻取置申候口書壱通越不申候と覚申候、此度差越申候、御受取可被下候、右之趣可然様ニ被仰上可被下候、以上奉頼候、恐惶謹言、

四月五日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

前々ゟ所持仕候印判紛失仕候間、丑四月五日ゟ此（印）印判用申候、以上、

和田町村

市郎右衛門（印）

一筆致啓上候、去ル比者井口ニ而早々得御意候、弥御堅固ニ御勤可被成と珍重ニ奉存候、随而御支配所嶋立組赤松村喜三郎と申者之女房、同村六兵衛・新七請人ニ而、洗馬御料和田荒井村貞右衛門方へ召抱申処、右女不奉公仕候故暇を為取、身代金幷上借り金共ニ相済申様ニと、右請人共方へ貞右衛門節々相断候へ共、滞り埒明不申迷惑仕候間、貴様迄御訴訟申上度由ニて、口上書差出申候、則右口上書進上申候、御披見被成双方御諚議之上、可然様ニ被仰付可被下候、拙者義頃日風気ニ而散々相煩罷有候、乍御六ケ敷右之趣何分ニも奉頼候、恐惶謹言、

四月九（十）日　浅利吉右衛門

濱崎八左衛門様

人々御中

貴札忝拝見仕候、然者頃日御風気ニ被成御座候趣不承、書中を以も不申上、御無音ニ奉存候、如仰之去比ハ井口ニ而得御意大慶奉存候、将又、支配所嶋立組赤松村喜三郎女房、御領和田荒井村貞右衛門方ニ奉公仕罷有候所、痛心故隙被出候処ニ相果申、身代上借り延引申ニ付、貞右衛門迷惑仕、貴公様迄訴訟申上候由、被入御念口書迄御そへ被下、得其意奉存候、就夫、請人赤松村六兵衛早速身代上借、急度返弁仕候様ニ申付候間、左様思召可被下候、何様其内貴面万々可申上候、恐惶謹言、

四月十二日　濱崎八左衛門

浅利吉右衛門様

貴報

去ル五日之御状相達致拝見候、其元無御別義、貴様弥御堅固ニ御

勤被成候旨、珍重御事御座候、此表相替義無御座、旦那始上々方様弥御機嫌能被成御座候、恐悦御同意奉存候、

一、先日去年之三分一金御取立候分被遣、其内五両悪金相返シ申候処、御請取候由、右金百姓方へ御返し、替金御請取、其内ニ而貴様御しち借金御引残而弐両之儀、現金米代と一所ニ被遣候半由致承知候、其節　旦那御手形、村々通帳御指添可被遣候、

一、御金山領当丑五人組帳御取候由ニ而、四ヶ村一札ニ被成被遣相届申候、

一、松本領板場村と御金山領馬草場出入、双方御役人御相談被成候筈ニ被仰合候由、何とそ内々ニ而相済候様ニ仕度物ニ御座候間、能々御相談御尤ニ奉存候、

一、山田小平次殿へ　旦那御誂之御客膳幷御はな紙之儀申進候処、現金米代持参之宰料参候節、被遣ニ而可有之と思召候由御尤ニ御座候、当春井堰川除御普請御窺相済候間、其元ゟ被遣候御目論見ニ付紙仕進候間、御書直させ可遣候、少々御扶持米減被申候、

一、竹田村乱気喜左衛門、当月朔日相果候由ニ而、所之もの注進書幷証文共ニ弐通被遣候、注進書ハ無之候而も能御座候間相返し申候、手形之義ハ文言御意ニ入不申候ニ付、案文認本紙共ニ進候、手形御取直シ可被遣候、其元ゟ被遣候手形文言ニ而ハ怪敷義も有之様ニ相聞候、親類共幷村中之者立合見申候而怪敷事も無之由申上候、案文之通手形御取可然義と思召候ニ付如此御座候、

一、去ル正月相果申候後家義ニ付、御取置候口書之内一通此度被遣候、是ハ押込置候喜左衛門、後家所へ参悪事可仕様も無之事ニ候へハ、口書ニ及不申候由御意ニ付、是ハ相返し申候、

一、去子御口米御延金ニ村々百姓願候由ニ而、書付指出申ニ付被遣入御披見申候、百姓勝手ニ能御座候ハ、願之通可被仰付候、尤被入御念手形御取置可被成候、恐惶謹言、

四月十四日　　渥美庄右衛門
　　松村仁左衛門

浅利吉右衛門様
　御報

一筆致啓上候、先以上々様方益御機嫌能可被為成御座と恐悦奉存候、此方御代官所中相替義無御座、雨次能農作大形仕付ケ申候、

一、去ル比ハ井堰川除御普請御窺相済、帳面被遣慥請取申候、

一、去ル子ノ御年貢現金、来月中ニ取立指上ケ可申候、御口米代金之義、百姓願之通被仰付候間、念入手形取置可申由、得其意奉存候、

一、竹田村乱気喜左衛門相果候ニ付、竹田村中証文指上ケ候処、文言御意ニ入不申候由ニて、御案紙被下、則其通ニ認させ、此度指上ケ申候、

一、右村次兵衛娘、去年七月宿を罷出、行衛知不申候処、先月行衛承出シ、竹田村之者共注進仕候、則注進書幷次兵衛手形共ニ、弐通指上ケ申候、

一、山田小平次殿御頼被遊候御客膳・御はなかみ、来月御金才料ニ越可申候、右御調物代金不足之由、小平次殿ゟ申来候間、金壱両小平次殿へ指越、手形取置申候、最前被遣候悪金之内指引ニ可仕候、

一、水野隼人正様、当月廿五日松本御発駕御参勤被遊候、御金山領道橋掃除等之義、例年之通申付御馳走可仕候、

一、拙者義、去月初方ゟ風気相煩申ニ付養生仕候処、持病指起余程難儀ニ御座候間、小平次殿へ頼入、隼人様御医者衆頼申候処、拙

者気分悪敷医者衆頼申段、隼人様御聞被遊、河原寿玄と申医者衆被仰付、今井村へ被遣被下、殊御直之御伝言被成下難有奉存候、御序之刻隼人様へ　旦那〻可然様ニ被仰被下候様ニと奉願候、拙者気分大方心能方ニ罷成候へ共、食事給兼申故か、尓今床はなれ不仕罷有、当月中漸肥立可申哉と奉存候、依之、隼人様参勤候(之)砌、御金(山脱)領御通之刻ハ、嶋村幸右衛門被参候様ニと水内郡へ申越、内々左様ニ御心得可被下候、

一、母義、先月散々相煩難見放躰ニ御座候由、其段佐々木惣七方へ同苗七郎兵衛方〻申越、相談之上、惣七了簡ニ而母病気看病仕罷有、快気仕候而、七郎兵衛義佐久郡へ伺(シ)公仕候、此段可然様ニ御取成奉頼候、

一、爰元御用方之義、指つかへ申義も無御座候、此上も何とそ指つかへ不申候様ニ可仕候と奉存候、気分も追日快気可仕候、右之趣、可然様ニ被仰上可被下候、奉頼候、恐惶謹言、

五月十二日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様

人々御中

去子ノ御年貢之内現金米代、当月末方ニ江戸江指上ケ可申間、被得其意取立可被申候、以上、

五月十一日　浅利吉右衛門

上今井・下今井・南和田・殿村・和田町・中村・下和田・境村・荒井・衣外・竹田村・小坂村・大池・岩垂村　右村々名主中

御用之義有之間、此書付ケ之者共、此状参着次第、今井村へ可被参候、以上、

五月十一日　浅利吉右衛門

両名主
赤怒田村　組　頭中
長百姓

一筆致啓上候、先以上々様方益御機嫌能可被為成御座と恐悦ニ奉存候、随而去ル八日〻十三日迄之大雨ニてくさり川満水仕、今井村ニ而田方拾四五石程、畑方四五石程水押、当分相見申候得共、水引不申候故難見届御座候、右之内田方ニ永流も可有御座哉と推量仕候、菟角当秋御検見之上改可被仰付旨、百姓方へ申渡し、今井村外ハ損作之村ハ無御座候、松本領抔ハ壱弐万石も水押御座候様ニ風聞仕候、佐久・水内・伊奈三郡ハ如何御座候哉、方々大分之満水と承及申候、

一、先日も以書状申上候、相届申候哉、次ニ拙者気分も追日心能方ニ罷成候、何も重而万喜可申上候、可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

五月十五日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様

前方相触候通、現金来ル廿七八九両日之内ニ現金持参皆納可有候、才料ハ来月三日四日頃ニ遣し可申候、油断有間敷候、以上、

丑五月廿六日　浅利吉右衛門

右之通、洗馬・御金山領十七ヶ村へ相触也、

前方申渡候通、去子御年貢現金米之内、半分之積り野口甚八郎御請負申候、就夫、右米為請取甚八郎手代徳左衛門・三十郎方(参候)へ間、例之通ニ相心得、明廿七日ゟ米附出シ相渡し可被申候、但来月十日以前ニ渡仕廻申様ニ可被致候、以上、

五月廿六日　浅利吉右衛門

上今井・下今井・南和田・殿村・中村・和田町村・下和田村・境村・荒井村・衣外村・竹田村・小坂村・岩垂・大池村・岩垂村　右村々名主中

尚々、筑摩郡現金払代金、来廿日頃ニ弥可被指越候、其節山田小平次方へ申達、内々誂置候膳拌小杉紙請取可被指越候、小平次方へも其段申達候、以上、

野口甚八方ゟ飛脚指越候ニ付、一筆申達候、

一、筑摩郡洗馬領去子之御年貢三分二米之内、現金払半分野口甚八郎請負候間、甚八手代断次第米相渡可申候、無申迄候得共入念手形取置、尤村々無滞様ニ急度可被申付候、御金山領之義ハ、百姓願之通百姓払ニ現金米不残可被申付候、為其如此候、以上、

五月十日　作之進

浅利吉右衛門殿

一筆致啓上候、弥御堅固ニ御勤仕被成候由目出度奉存候、此御地上々様方御機嫌能、拙宅無異ニ罷有候、其以後者以書状も不得貴意、御無音背本意候、御用木方用事多乍存知、御無沙汰御免可被下候、

一、御支配所洗馬領去子ノ御物成現金御払米、此方ニ而金子差上ケ、此度　旦那様直御書為持進上仕候、徳左衛門御断可申上候間、勝手次第御米不残御渡被遊可被下候、諸事御指引奉頼候、飯嶋通も御請仕、是ハ山方入用ニ仕候、定而飯嶋御役人中様より、其段も可被仰進与奉存候、拙者義無妻故悴共箕輪へ遣し置申覚悟仕、七月中ニハ召連罷登り可申候、其刻ハ是非御尋申可得貴意候、米方之義滞り不申様ニ被仰付可被下候、奉頼候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

五月十一日　野口甚八郎

浅利吉右衛門様

去ル十日之御書、当廿六日ニ野口甚八手代三十郎致持参奉拝見候、先以　上々様方御機嫌能被為成御座、恐悦至極ニ奉存候、

一、筑摩郡洗馬領去子ノ御年貢三分二米之内、半分野口甚八郎御請仕候間、甚八手代断次第米相渡手形取置、尤村々無滞様ニ急度可申付候、御金山領之義ハ、百姓願之通、現金米之分不残百姓払ニ被仰付候由、右何も奉得其意候、

一、筑摩郡現金代金之義、例年六月中ニ皆納仕来り候処、拙者了簡違ニ而、五月末方ニ皆納為仕可申旨最前申上候、来月中旬過ニ何とそ御金指越可申と奉存候、

一、去ル比之満水ニ而、所々川除損申候、和田井口当春御普請被仰付候石積跡もなく押流、井口替り水懸り不申候ニ付、人足弐三千人段々出シ普請為致、水ハ当分田かわき不申様ニ参候、此上水参兼候ハヽ、洗馬中人足かけ田地損作不仕候様ニ可申付と奉存候、

一、水野隼人正様去ル廿五日ニ松本御発駕、御参勤被遊候、拙者気分悪敷御座候故、内々嶋村幸右衛門罷出候筈ニ御座候処、隼人正様役人中右之様子被承、幸右殿遠方ゟ之御勤不入御事、吉右衛

門世悴小四郎を出シ可然由、山田小平次殿迄御内証御座候ニ付、小四郎を御金山領迄出シ申候処、隼人正様御念頃ニ御意被遊、御使者幷鳥目弐百疋小四郎方へ被下置、難有仕合ニ奉存候、

一、旦那江　隼人正様御口上ハ、いつも道橋掃除等被仰付忝被思召候、於江戸旦那江御礼可被仰旨御意被成、此趣を旦那江能々申進候様ニと、御念頃ニ被仰付候、委ハ重而可申上候、右之趣可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

五月廿十八日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様
渥美庄右衛門様

人々御中

尚々、洗馬領申所ニ而手代罷有候、是ゟ麻績村迄二日路、御金山領ゟ麻績村迄ハ一日路有之候と、旦那御物語被遊候由ニ御座候間、左様ニ御心得御挨拶可被成候、以上、

去ル十二日之御状相届致拝見候、其元無御別条候由、此方相替儀無御座候、上々様弥御機嫌能被成御座候、

一、貴様御儀、久々御病気御座候由、乍然今程御快方御座候旨珍重奉存候、申迄無御座候得共、向暑気候間、乍此上無御油断御保養専一御座候、

一、田作之義、雨次よく仕付申候由、一段之義御座候、

一、去子御年貢現金、来月中御取立可被成由被仰越候、来月之筈にて有之間敷様ニ存候、若御書違候哉、但例年六月御取立之筈ニ候哉、旦那ニも御不審、拙者共も聢と覚不申候故如此候、

一、竹田村喜左衛門相果候ニ付、手形之儀御取直(ナラシ)候而被遣相届申候、

一、右村次兵衛娘、去年七月宿を罷出行衛知不申、先月居所聞出シ候由訴出候付、則注進書幷次兵衛手形被遣相届申候、落着所知候へハ先一段ニ候、乍去善光寺ニ親類ニ而も有之、くわんけいじを頼、尼ニ仕候哉、無左候而ハむさと髪おろし候事ハ有之間敷と不審ニ被思召事ニ御座候、

一、山田小平次殿へ御頼被成候膳幷御はな紙之義、来月御金才料ニ可被遣由、右御調物之代金不足之由ニ而、金壱両小平次殿へ被遣候由、重而手形御越、御指引可被成候由承知仕候、

一、水野隼人正様、廿五日松本御発駕ニ付、道橋為掃除之御出可被成と思召候得共、貴様御病気ニ付、幸右衛門殿へ被仰遣、幸右衛門殿御出向被成筈之由被仰越候、水内郡ゟも右之通申来候、

一、貴様御煩ニ付、医者之義小平次殿へ被仰入候所、隼人正様御町ニ達、河原寿元と申御医者被仰付、殊ニ御直之御伝言なと被遊候ニ付、隼人正様へ　旦那ゟ右之趣被仰進候様ニと思召之由、御紙面之通申上候、

一、松本領と松城領と境論之場所為御検使、御小姓組大久保豊前守様御組三上半兵衛様、御代官ゟ完倉(クラ)与兵衛様、右御両人被　仰付候、来ル廿七日江戸御発駕、追分ゟ小諸へ御懸り、麻績村へ御越、さるか馬場御見分之由ニ御座候、就夫、貴様儀ハ遠方ニ御入、殊ニ御病気ニ候、幸右衛門殿へハ洗馬へ御用儀ニ付御越候故、御見廻候由ニ而、旦那ゟ兼而申越候ハ、御代官所近所之義ニ御座候間、御用之義も御座候ハヽ、承候様ニと申越候付罷出候旨御申上、麻績迄御見廻被成候様ニと　旦那ゟ幸右衛門殿へ被仰遣候へ共、乍然右之御状遅ク相届可申も難計御座候間、幸右衛門殿其元ニ御入候ハヽ能々被仰通、右之通可被成候、此方ニ而御検使様方被仰候ハ、手代衆見廻ニ者及不申候、然共江戸へ書状なと被遣度節御頼可被成と、旦那へ与兵衛様被仰候間、此段も御申上、御状被

遣候ハヽ、　隼人正様御屋敷へ御頼、早々此方へ参候様ニ可被成候、若又御見廻之節ハ、御用も無之候ハヽ、重而御状なと被遣候ハヽ、何村之誰所へ被遣候様ニと御家来衆へ御申置、何村誰ニも御検使様方ゟ御状参候ハヽ、早々吉右衛門殿へ成共、幸右衛門殿へ成共、早速相届候様ニ御申付置可被成候、

一、御在所ニ而先月御袋様御煩被成候付、七郎兵衛殿も御逗留、又貴様御病気ニ付、其元へ御越、何茂御快気ニ付当月三日佐久郡へ御帰候由頃日申来候、御母儀様、御本腹被成目出度奉存候、

一、金銀吹直シ付、古金之儀来寅三月ゟ通用御停止之義ニ付、御書付出候間、写ニ御判被成被遣候、村々へ御廻し可被成候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、

五月廿四日　　渥美庄右衛門
　　松村仁左衛門

浅利吉右衛門様

覚

金銀吹直に付、古金銀者新金と弥引替可申候、御料者御代官、私領ハ地頭より申付置、遠国迄古金銀不残様に引替させ可申候、新金銀之儀、来寅三月迄者只今之通新金銀と一様に用之、其以後者古金銀通用相止之、新金銀計可用之間、可存其旨候、若滞儀有之ハ、金銀吹直場所迄可申出候、以上、

丑四月日

如斯御書付出候ニ付、写遣候間、可被得其意候、面々御代官所中へも、此旨可被相触候、以上、

四月廿九日　　諸星伝左衛門
　　松平美濃守

荻原近江守
井戸対馬守
稲生下野守

太田作之進殿

右之通御書付出候間、写相触候、古金銀之分、不残新金ニ引替可申候、来寅ノ三月以後者、古金銀通用御停止被仰出候間、得其意可申候、以上、

丑五月　　太田作之進

右御書付、洗馬・御金山領拾七ヶ村へ相廻ル也、

古金銀通用、来寅ノ三月迄可限之旨、御書付之写し従　旦那御廻シ被遊候、右御書付之趣拝見仕、村々ニ写し置、大小之百性幷門屋・店かり・寺社其外穢多等ニ至迄、御書付之趣申渡、急度相守可申候、右御書付之写し、末之村ゟ今井村へ持参、我等方へ返し可被申候、以上、

丑六月朔日

上今井村・下今井村・岩垂村・大池村・小坂村・竹田村・南和田村・殿村・中村・和田町村・下和田村・境村・衣外村・荒井村・反町村・赤怒田村・殿野入村・金山町村　右村々名主中

追而従　旦那御廻シ被遊候御書付も、此郷順之通ニ可被相廻候、以上、

一筆致啓上候、弥御無事ニ御勤可被成と奉察候、頃日も書状進上仕候、相届申候哉、打続悪敷天気ニ而何方も御同前ニ難儀仕候、

一、松本領と松城領と境論所之場所、為御検使御小性組大久保豊前

守様御組三上半兵衛様・御代官ゟハ完倉与兵衛様、右御両人被仰付、先月廿七日江戸御発駕、追分ゟ小諸へ御掛り、麻績村へ御越、さるかはゝ御見分之由、就夫、拙者儀ハ遠方ニ罷有、殊ニ病気ニ而御座候故、貴様彼地へ御出、洗馬へ御用むき候て御出候ニ付、御見廻被成候由ニ而、兼而作之進方ゟ申越候ハ、御代官所近所之儀ニ御座候間、御用之儀も御座候ハヽ、承候様にと申越候ニ付、罷出候旨御申上ケ可被成候由、江戸ニ而御検使様方被仰候由ハ、手代衆見廻ニハ不及候、然共、江戸へ御状抔被遣度節ハ御頼可被成と　旦那江与兵衛様被仰之由、此段も御心得御状被遣候ハヽ、　隼人正様御屋敷江御頼、早々　旦那御屋敷江相届候様ニ可被成由、扨又、御見廻之節ハ御用も無之、重而御状抔被遣候ハヽ、何村之誰所へ被遣候様ニと、御検使様方御家来衆へ御申置可被成由ニ御座候、且又、何村誰ニも御検使様方ゟ御状参候ハヽ、貴様へか吉右衛門方へ成共、早々相届候様ニ御申付ケ可被成由、一、洗馬領と麻績村迄ハ二日路、御金山領ゟおミ村迄ハ一日路有之由、　旦那御検使様方へ御物語被遊之由ニ御座候、左様御心得御挨拶可被成由ニ御座候、

右之通、其元へ江戸ゟ被仰越候得共、貴様御金山領へ　隼人様御馳走ニ御出候半と思召、拙者方江被仰遣候、為念如此御座候、恐惶謹言、

六月朔日　　浅利吉右衛門

嶋村幸右衛門様

先月廿四日之貴札、同廿九日ニ山田小平次殿ゟ相届、致拝見候、先以　上々様方弥以御機嫌能被為成御座之旨、恐悦ニ奉存候、一、金銀吹直ニ付古金之儀、来寅ノ三月ゟ通用御停止之御書付之写御判被遣被遣(行)、御書面之趣奉得其意、村々へ相廻し申候、右御書付ハ拙者方ニ指置、当秋指上ケ申哉、又ハ御金才料上ケ可申哉、承度奉存候、

一、松本領と松城領論所猿かはゝ為御検使と、三上半兵衛様・完倉与兵衛様右御両人被　仰付、先月廿七日其御地御発駕、彼地へ御越被遊候ニ付、嶋村幸右衛門右御両所様へ御見舞可申上旨、委細御紙面之趣奉得其意候、先書ニ如申上候、　隼人正様御金山領御通之節ハ、小平次殿ゟ御内証有之而、世悴小四郎罷出候間、幸右衛門儀ハ不罷出候、右御書面幸右衛門方へも被仰遣候へとも、遅ク相届可申哉と為御念、拙者方へも被仰下候由、尤幸右衛門御金山領へ不参候へ共、為念被仰下候御紙面之趣を以、幸右衛門方へ書状遣し申候、

一、先月満水ニ付、今井村くさり川通田畑弐拾石程も水押仕候、此段先月十五日之日付ケニ而書状進上申候、相届不申候哉、此度之御状ニ相見へ不申候、和田堰口押流申儀ハ、先月末方ニ申進候、右之外相替儀ハ無御座候、万喜重而可申上候、可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

六月朔日　　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

内々申渡候通、現金之義、当月九日十日両日之内ニ、今井村へ持参皆納可有之、遅納候ハヽ、名主別而可令迷惑候、油断有間敷候、以上、

六月四日　　浅利吉右衛門

御金山領四ヶ村へ、此書付ケ、殿野入村権三郎帰候間誂遣ス、

右之文言ニ而、洗馬十三ヶ村へも六月廿日ニ相廻ス、

野口甚八郎御請米之義、明十六日ゟ廿日迄ニ甚八郎手代と相対之場所迄附ケ届、少も無滞り相渡可被申候、油断いたし遅滞之村ハ、諭議之上急度迷惑可申付候、以上、

丑六月十五日　浅利吉右衛門

拾三ヶ村へ右之通申触、

現金之義、前方段々諭議之上申渡候通、来ル廿日ニ皆納可有之、万一遅納之村ハ、名主別而迷惑可申付候、前方も申渡候通永銭迄取立、未進無之様ニ為相納可申旨、江戸ゟ被仰越候、被得其意相納可被申候、壱分も不足ニ候ハヽ、相納不申候間、其心得可有之油断有間敷候、以上、

六月十七日　浅利吉右衛門

上今井・下今井・南和田・殿村・和田町村・中村・下和田村・境村・衣外村・荒井村・竹田村・小坂・大池村・岩垂村　右村々名主中

追而此書付ケ披見之名主、村下ニ致印判相廻し、末之村ゟ持参返し可被申候、以上、

古金銀之義ニ付、御触状尓今不帰候、早々為持今井村へ越可申候、御金才料ニ江戸へ越候、唯今迄如何様成義ニ而延引致候哉、不届至極候、以上、

六月十七日　浅利吉右衛門

御金山領四ケ村

名主中

尚々、古金通用之義ニ付、旦那御廻状指上ケ申候、

一筆致啓上候、先以　上々様方益御機嫌能可被為成御座と恐悦ニ奉存候、此方御代官所中相替儀無御座候、

一、去子御年貢現金百姓払之御金弐百八拾六両弐分、下今井村弥兵衛・竹田村伝四郎才料ニ而指越候、御請取被成御上ケ可被下候、則村々金納員数書指添越申候、

一、当春相納候三分一金之内、五両悪金之由ニ而、被遣候百姓方へ相渡シ、替り之金請取、三両ハ拙者拝借ニ請取、壱両山田小平次殿へ御買物之代ニ相渡、残り壱両右才料ニ相渡し越申候、三分一村々金納員数別紙ニ書付ケ進上申候、村々金納通帳も進上いたし候、

一、今井村今度相納候御金之内、古金小粒弐拾両御座候、包金之書付ケニ今井村納之内古金と書付ケ申候、此金子ハ今井村之者連判金借り申候とて、隠居いたし候尼之金ヲ、漸ニ借請申候由、此金拙者共見申所、成ほと能金ニ而御座候得共、後生金ニいたし候とて久敷包こめ置申候故、さひ候而かひつき申候故、若悪金とて両替屋ゟ返り可申哉と存、右之通書付ケ進上申候、悪敷御座候ハヽ、御返し可被成候、早速引替水内郡へ指越、其御地へ上ケ可申候、

一、いつもの様成義ニ而御座候へとも、当夏ハ在々別而指詰り申様ニ相見へ申候、麦作も取実無御座、別而難儀いたし候由ニ御座候、右之趣可然様ニ被仰上可被下候、万喜重而可申上候、恐惶謹言、

六月廿三日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

追啓仕候、山田小平次殿ゟ之　旦那御調物之代金壱両、小平次殿へ遣し、小平次殿ゟ右金請取手形進上申候、以上、

六月廿三日　浅利吉右衛門

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

頃日道中筋徒者相見江、時々者弐三拾人程宛茂組合候而、悪事致候由相聞候間、各御代官所道中筋疑敷者有之候ハヽ、無油断心掛捕候様ニ可被申渡候、尤捕候者有之候ハヽ、其所支配之御代官諚議之上、此方江可被申聞候、以上、

五月廿七日　諸星伝左衛門

井戸対馬守

荻原近江守

稲生下野守

松平美濃守

神尾備前守

太田作之進殿

如此道中筋改可申之旨、御書付出候ニ付写シ遣候間、御紙上之趣可奉拝上候、在々ニ而茂疑敷もの有之候哉、心付可申候、若疑敷者有之候ハヽ、早々此方へ可申来候、以上、

丑六月　太田作之進

今井村・岩垂村・大池村・小坂・竹田・荒井・衣外・境井・下和田・和田町・中村・殿村・南和田村・御金山領反町・赤怒(田脱)・殿野入・御金山町村

右之御書付ケ、丑ノ七月六日ニ江戸ゟ参候ニ付、洗馬・御金山両御料拾七ヶ村江、同日相廻し候、

薬袋七郎兵衛

尚々、七郎兵衛殿ゟ之御艾、旦那壱壺、頓入様へ壱壺御上ケ被成、則頓入様へも御状共ニ上ケ申候へハ、殊之外御満足被仰候、重而御返事可被遊候間、拙者共ゟ能相心得申進候様ニと御意ニ御座候、以上、

一筆致啓上候、吉右衛門殿御気色御勝不被成候ニ付、松本へ御出御養生被成候由、山田小平次殿ゟ　旦那江被仰遣承知、佐久郡ゟも頃日御飛脚参候時分、七郎兵衛殿儀、吉右衛門御気色ニ付松本へ御越候由被仰遣、千万無御心元、今程如何御快方ニ御座候哉、承度存候、何とそ早キ便ニ御報奉待候、

一、今度国々御絵図出来仕筈、信濃国ハ真田伊豆守様へ(衍)・水野隼人正様・松平遠江守様へ被仰付候由、就夫、御代官所郡付・村付被成、松平美濃守様へ御上候様ニと之由ニ候故、御中ケ間御聞合被成、年々御割付出申候村々幷わけ郷之儀御書付、去ル比御上ケ被成候所、枝郷迄御書付被成候様ニと、重而御廻状参候、先年其筋御請取初入之時之絵図見へ申候所、枝郷之わけしれ不申候間、早々御吟味被成、村々枝郷御書付可被遣候、本村ニつゝき申所ニもあさなハ可有之候、夫ニハ御かまいなく、本村ヲはなれ百姓居申候所之村名御書付可被成候、枝郷之高も知申候ハヽ、御書付可被成候、尤枝郷ニ居百姓之持高集申候ハヽ、しれ可申候得とも、早速知兼申候ハヽ、何と申所本村と何町計隔り、百姓数何人程罷有候と申儀、御書付可被遣候、

一、初入之絵図ニ上荒井・下荒井、上今井・下今井、其外ニも此類書付御座候、是ハ本村上ニ而候哉、下ニ而候哉、此段も御書付可被成候、其内小坂村ニハちいさき村方数ヶ所有之、小坂之内と計

書付、所々名無御座候、此類も有之候、各様御覚も可有之候、又無覚束所ハ百姓ニ御尋、少も早ク御書付可被成候、猶期後慶之時候、恐惶謹言、

七月九日　　渥美庄右衛門
　　松村仁左衛門

浅利吉右衛門様
薬袋七郎兵衛様

追而今度新金ニ而弐朱判ニ被仰付、世間通用仕筈御座候、先為心得（御心得）申進候、以上、

七月九日　　渥美庄右衛門
　　松村仁左衛門

浅利吉右衛門様
薬袋七郎兵衛様

先月廿三日之御状致拝見候、弥御無事御勤被成候由珍重奉存候、此方　上々様方倍御機嫌能被成御座、恐悦御同意御事御座候、

一、去子御年貢現金米百姓払之代金之内弐百八拾六両弐分、今井村弥兵衛・竹田村伝四郎持参相届申候、右之内金弐分悪金御座候、則大池・今井村分ニ而御座候、御目録之内右両村悪金壱分宛引、相残候分御返ニ付、其外村々御目録之通記、何茂御押切り御判取進上申候、

一、春中被遣候金三百四拾弐両弐分之御手形、幷悪金之替五両之内貴様御春借り三両之御手形、山田小平次殿へ壱両之手形、現金壱両被遣候、以上三百四拾七両弐分、是又御通ニ付押切御判取進候、

一、当夏も在々指詰り申候様ニ御見及、麦作取実無御座致難儀候由、御書面ヲ以入御披見申候、例年之事何とも拙者迄笑止事御座候、

一、金銀通用之儀ニ付、御触状御返し相届申候、

一、五月十五日之御状、同廿八日之御状、六月朔日之御状、何日根（も・脱）野儀兵衛殿ゟ相届申候、

一、隼人正様其元御発駕被遊候時分、貴様御気分悪敷御座候ニ付、嶋村幸右衛門殿御出候筈ニ御申合候所、隼人正様御役中（人・脱）、右之様子其趣幸右衛門殿遠方ゟ御勤候事不入事、貴様御息小四郎殿ヲ御出シ可然由、山田小平次殿迄御内証御座候付、小四郎殿御金山領迄御出シ候処、隼人正様御懇比之御意共、幷御使者ニ而鳥目弐百疋御拝領ニ而、御満足被成候由御尤存候、小四郎殿初而御大名へ御目見へ、殊ニ御拝領物有之、幾久目出度御儀と拙者共迄大慶仕候、其後　隼人正様へ　旦那御見廻被成候間、定而右御礼可被仰上と存事御座候、

一、先々月之満水ニ、今井村くさり川通田畑弐拾石程、水押ニ罷成候由、日外被仰越候、其御返事仕候かと覚候得共、後之御状ニ右之訳御返事不申候由被仰越候而、如此之少分之事ニ御座候間、御勘定所へ被仰上ニハ及申間敷候との儀御座候、検見前御吟味被成御意御尤ニ御座候、

一、道中筋盗賊有之由ニ而御書付出候、其元ニハ往還宿ハ無御座候へハ、為念在々迄も御触被成候ニ付、御書付之写ニ御判形被成被遣候、村々御廻判形御取、重而此方へ可被遣候、

一、其元検見時分、御考候而早キ便ニ可被仰遣候、

一、今井・大池両村悪金弐分、此度相返し候間、両村へ御渡可被成、右悪金之分ハ御請取ヲ除キ申候付、尤替金被遣候ニハ及不申候、猶万喜追而可得御意候、恐惶謹言、

七月朔日　　渥美庄右衛門

松村仁左衛門

浅利吉右衛門様

御報

追啓　此度亥年御勘定御仕上被成候付、遠山売木改役人御給金之請取手形、未伊奈郡より不参候而こまり申候ニ付、旦那へ御窺申、伊奈郡へ書状を以申遣候、其許ゟ飛脚ニ而被遣可被下候、江戸ゟ伊奈郡へ急御用被仰遣候付、其元ゟ飛脚被遣候与被仰聞、郡中飛脚ニ而被遣候而も苦ケ間敷存候、但乍御太義御家来成共被遣可被下候、弥郡中之為ニも、能御奉公ニも成可申哉、菟角此状届キ次第、早々可被遣候、村次ニ而も手間ヲ取可申と存、右之通御座候、尤伊奈郡へも急候由申遣候、以上、

七月朔日　渥美庄右衛門

松村仁左衛門

浅利吉右衛門様

従江戸松村仁左衛門殿・渥美庄右衛門殿ゟ之御用之状、飛脚ニ而被遣相届申候、右御用之儀者、爰元ゟ飛脚ニ而江戸へ申遣候御事ニ御座候、以上、

七月八日　内田瀧右衛門

枚本吉兵衛

薬袋七郎兵衛様

当月九日之御連札、同十四日夜ニ入佐久郡ゟ相届、拝見仕候、

一、今度国々之御絵図出来仕筈、信濃国ハ真田伊豆守様・水野隼人正様・松平遠江守様江被仰付候由、就夫、御割付出申候村々之枝郷、之上村（又ハ）・下村之わけ諚議仕候而、早々書付指上ケ候様ニ被仰下奉其意、洗馬・御金山領村々吟味仕、帳面上ケ申候、

一、前方被仰下候去子御年貢勘定帳写、上ケ候様ニ被仰下候間、是又写差上ケ申候、

一、今度新金ニ而弐朱判被仰付、世間通用仕筈御座候由承知仕、村々へも其段為申聞候、万喜追々可申上候、恐惶謹言、

七月十七日　薬袋七郎兵衛

松村仁左衛門様

渥美庄右衛門様

秋山伴右衛門様

一、今度新金ニて弐朱判出来、世間江相渡候、通用自由乃ために候間、国々所々迄其旨を存、商売請取方渡方、無滞弐朱判を茂用可申候、弐朱判者壱分判半分之積たるへき事、

一、大判・小判・壱分判、勿論有来通り通用可仕事、

一、前々相触候通り、似せ金銀仕者有之ハ、訴人ニ出べし、縦同類たりといふ共、其科をゆるし、急度御褒美被下、あたをなさゝる様に可申付候、惣而金銀之細工仕者は、其所ニて心を付、少茂疑敷儀を見および聞およひ候ハヽ、早速可申出、隠置外よりあらわるゝにをゐてハ、本人ハ不及申、諸親類其所のもの迄可為曲事者也、

丑六月日

如此御書付出候ニ付写遣シ候間、可被得其意候、面々御代官所中江茂可被相触候、此廻状留り之方より近江守方へ可相返候、已上、

七月二日　諸星伝左衛門

荻原近江守

井戸対馬守
稲生下野守
松平美濃守

太田作之進殿

右之通り、御触ニ候間、奉得其意、御紙上之趣相守可申候、自然金銀之細工仕候ものニ疑敷儀有之候を隠置候ハヽ、急度曲事ニ可被仰付候間、村中小百姓・召仕等迄、念を入可申聞候、以上、

丑七月　　太田作之進

洗馬
御金山領　拾七ヶ(村脱)へ相廻ル御触状

今度新金ニ弐朱判出来、世間通用自由のためニ被仰付候ニ付、従旦那御廻状御廻シ被成候間、早々村々無遅々相廻シ写置、大小之百姓へ右之旨可被申渡候、尤此御廻状江戸江返上申候間、村下ニ印判いたし、留村ゟ今井村江早々持参、返シ可被申候、以上、

七月廿日　　薬袋七郎兵衛

洗馬
御金山領　村々名主中

丑ノ七月廿日ニ被仰遣候御状(用)

一、道中筋徒もの御諚義ニ付、被遣候御触状、村々庄屋判形御取御返上相届申候、

一、其郡御検見ハ、八月廿四五日比ニ而可有御座由、被仰越致承知候、

一、新金ニ而弐朱判出来ニ付、御触状出申候、此度被遣候、例之通村々御廻シ、庄屋印判御取、便之節此方へ可被遣候、以上、

七月十五日　　松村仁左衛門
渥美庄右衛門

薬袋七郎兵衛様

一、度々申渡候其村々商人渡米之義、先月中ニ商人方へ附渡申筈之処、今以不埒之由商人方ゟ訴候、御蔵納候御年貢米、商人江相渡候ニ滞り義ハ有之間敷様ニ存候、来ル廿七八両日中ニ不残急度相渡可被申候、右日限ニ遅ク候ハヽ、名主可為越度候、以上、

丑七月廿四日　　薬袋七郎兵衛

小坂村・荒井村・衣外村・殿村・中村・和田町村　右村々名主中

覚

一、洗馬御料今井村ゟ浅利吉右衛門女房四拾歳・同人娘十三歳・同当歳、以上三人甲州中郡乙黒村迄差越申候、御関所無相違御通可被下候、以上、

元禄十年丑八月朔日　　太田作之進代
薬袋七郎兵衛
内田瀧右衛門

塩尻口
御番所中

覚

一、金六両三分・永三拾三文　大池村
一、金五両弐分・永九文　小坂村
一、金六両・永百三拾壱文　竹田村
一、金三両壱分・永弐百四拾四文　荒井村

一、金壱両壱分・永百八拾三文　衣外村
一、金三両弐分・永九拾四文　殿村
一、金四両三分・永弐拾三文　南和田村
一、金弐両三分・永八拾四文　中村
一、金弐両弐分・永百拾五文　下和田村
一、金五両・永五拾壱文　和田町村
一、金壱両壱分・永弐百四文　境村
一、金壱分・永弐百三拾弐文　岩垂村
一、金拾両壱分・永百八拾七文　今井村
一、金壱両壱分・永九拾三文　反町村
一、金壱両三分・永八拾六文　赤怒田村
一、金壱両・永百三拾壱文　殿野入村
一、永弐拾三文　金山町村

金合五拾八両三分・永弐百拾三文

右是ハ、信州筑摩郡村々去子之御年貢三分一金之残り幷御口米代金、只今御取立被遊筈ニ御座候処ニ、来ル十一月迄御指延被下候得者、百姓勝手ニ罷成候間、達而御訴訟申上候ニ付、願之通ニ御延被下難有奉存候、然上ハ十一月十日前ニ急度御金指上ケ可申候、自然相滞り申候ハヽ、如何様之曲事ニも可被仰付候、為其村々名主連判手形差上申候、仍而如件、

元禄拾年丑三月　信州筑摩郡洗馬領

御代官様

御金山領名主之覚　反町利兵衛、赤怒田村角兵衛・重兵衛、殿野入村三郎兵衛、御金山町村伝七郎

指上ケ申一札之事

一、信州筑摩郡洗馬領大池村之内八幡原と申所ニ、年比六拾計之乞食男壱人倒死罷有候を、十一日之朝見付ケ申ニ付、名主・組頭・村中之者立合相改申所ニ、何方之者ニ御座候哉、見知り者も無御座候、衣類ハ古キ木綿ノ破単物壱ツ、古キ破かたひら壱ツ、袋二ツ、きせるたはこ入火打共ニ、ひさく壱本、草鞋かけ壱そく、此外何ニ而も無御座候、殊之外疲衰倒死罷有候ニ付、其通御注進申上候得者、早速御出死骸御改被成候所、打疵切疵無御座候、乞食無紛相見へ申ニ付、番人ヲ被仰付、さらし置申候へ共（後欠）

（二〇一五年十二月四日受理、十二月二十二日掲載承認）